

『別雷社歌合』注釈(三)

武田元治

述懐

一番 左勝

121 廻とにかくに浮世を夢と知りながらさてもいとはぬ我やなになる

右

観蓮

122 かぞふれば身は七そちをへぬれどもまだみどり子の心ちこそすれ
左歌、さてもいとはぬなどいへる心いとをかしく、あはれにこそ
侍るめれ。

右歌、身はななそちといへるほど、宜しくきこえて、末の句いぶ
かしく侍るを、まだみどり子のといへるや、すこし幼少のすぎた
る心ちすらん。左勝とすべし。

【通釈】

述懐

一番 左勝

隆季

121 あれこれと、うき世を夢のようなものと知りながら、それでも世を
捨てない自分は、一体どういふものなのか。

右

観蓮

122 数えると、わが身は七十年を過ぎたのだが、まだ幼子のままでい
る気がするのだ。

左の歌は、「さてもいとはぬ(我や何なる)」などと詠んだ心が大
層面白く、またしみじみと心をうたれるように思うのです。

右の歌は、「身はななそち(をへぬれども)」と詠んだあたりが、
結構に思われて、下の句が知りたい気になるのですが、「まだみ
どり子の(心ちこそすれ)」と言ったのは、いささか幼少の程度
が度を越えたと見られるであろうか。左の勝とすべきであろう。

【注】○浮世 うき世。「憂き世」として、つらいことの多い世の中を
意味する一方、漢語の「浮生」「浮世」の概念の影響で、定めない人
生、はかない世の中といった意味合いもある。○いとはぬ 俗世間を
いと避けることをしない。○七そち 七十年。「ち」は、数詞に添
えて用いた接尾語。

【考察】左の歌は、「うき世」を夢のようなものと知りつつ、いとい捨
てることなく生きる「我」は、一体どういふものなのかと、自己の実
体について疑問を投げかける。「我やなになる」の句で結ぶ先行歌に
は、

梅もみな春近しとて咲くものを待つ時もなき我やなになる(『貫
之集』八四七、『拾遺集』一一五七、紀貫之)

があるが、これは世に認められるのが期待できない自分は何なのかと
嘆いた作である。これに比べると左歌は、仏教思想を背景に、内なる
「我」は何かを自身に問いかけており、より深く自己を見詰めている
と思う。

右の歌は、数えると七十歳まで自分は生きたのだが、まだ「みどり

子」のままの気がする、と詠んでいる。長生きをした身として、自己の本質は幼い時と少しも変わっていないと認識した際の感慨であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「さてもいとほぬ(我やなになる)」などと詠んだ心を、「いとをかしく、あはれに」と評している。これは歌の発想が「いとをかしく」詠まれていると見られる一方で、そのように詠んだ作者の心情が「あはれに」思われるということであろう。

右歌については、「身は七十ち(をへぬれども)」などと詠んだ上の句は「よろしく」思われて、それを受ける下の句が知りたい気になるが、下句に「まだみどり子の」心地がすると言うのは、「すこし幼少のすぎたる」気がすると評する。物心のつかぬ「みどり子」をもち出すのは行き過ぎだと言っているのである。

【備考】一番左歌は『新続古今集』(一九一六)に収められている。

二番 左勝

123人はまたおなじいのりをいのりともただしき道を神はことわれ

実房

右

讚岐

124いはでのみたのみぞわたるよそながらみたらし川の音にたてねど

左、存^ニ故実之風、叶^ニ雅頌之時。彼の毛詩、然者頌者美^ニ盛徳之形容、以^ニ其成功^ニ告^ニ於神明^ニ者也といへる、この心なるべし。

右、みたらし川の音にたてねどといへる、歌ざまはをかしく侍るを、よそながらたのみわたらんもほいなくやあらん。以^レ左為^レ勝。

【通釈】

二番 左勝

実房

123人々はまた、同じように神に祈るにせよ、正しい道理のあるところを、神は判別してください。

右

讚岐

124口には出さず、よそながら(神を)お頼りしております、——御手洗川の川音のように人に知られるのを、避けていますが。

左の歌は、伝統的な詠み様を保ち、雅頌の詩の行なわれる時世に

合った作である。それである『毛詩』(の大序)に、「頌は、盛徳の形容を美め、其の成功を以て神明に告ぐる者なり」と言っているのは、この場合のような意味合いであろうと思う。

右の歌は、「みたらし川の音に立てねど」と詠んでいるのが、歌の様子としては面白いと思えますけれど、よそながら頼りにしているというのでは不本意なことだろうかと思う。左の歌を勝とす

【注】○ことわれ 判別せよ。○たのみぞわたる 頼りにしている意

であるが、「わたる」は後の「みたらし川」と縁語の関係になる。○

みたらし川の音にたてねど 「御手洗川」は、神社の参拝者が身を清める社前の川だが、特に上賀茂神社の境内の川が歌に詠まれることが多い。ここではその川音から「音に立つ」と言い、評判になる、広く知られる意を示す。なお、「みたらし川」は前の「よそながら」に続いて「見」を掛けて言ったとも考えられる。これは『拾遺集』の伊勢の歌(五三四)の「そら目をぞ君はみたらし川の水……」という言い方と同様とすれば可能性があるが、どうであろうか。当面「通釈」ではこの見方によらなかつた。○雅頌 『詩経』で「六義」とされる六種の詩の体の中の雅と頌。六種の体の中で、賦・比・興は表現方法による分類であるが、風・雅・頌は内容による分類に属する。そして風が諸国の民俗歌謡の類であるのに対して、雅は王朝の政治にかかわる正言と見られる詩、頌は祖先神霊を宗廟に祭り徳を頌美した詩を言ったようである。○毛詩 漢代に毛氏が伝えた詩の書の意で、『詩経』を言う。その初めに置かれた総論に当たる序は「大序」と呼ばれ、その一部を俊成の判詞に引用したのが、「頌者」以下の部分である。

【考察】左の歌は、人々は同じように神に祈ると見えるが、「正しき道」を神は判別されよと祈る心であろう。言葉を飾らず、率直な詠み様である。

右の歌は、言葉には出さず「よそながら」お頼りしているとの心を、「みたらし川」の語で上賀茂社に寄せて詠んだものと思われる。これ

は左歌に比べると修辭上の技巧も用い、より柔軟な詠み様と見える。

俊成の判詞は、左歌については、「故実之風」を保ち、「雅頌」の詩の行なわれる時世に合う作であると言ひ、『毛詩』大序の一節を引いて称賛している。王朝の正統的な歌風で神に祈る歌として優れた作と見たようである。

右の歌については、下句の詠み様は「をかしく」見えるが、「よそながら」頼むのは不本意だろうと評し、左の勝としている。

三番

左持

実国

180 こしかたも今行末もならのはのひろきめぐみを頼むばかりぞ

登蓮

181 此よにもなほおどろかぬ心かないつをかぎれる夢ぢなるらん

登蓮

左歌も、（群書類従）以往未来などのひろきめぐみをたのむ心、をかしくみえ侍り。

右歌は、いつをかぎれるなどいへる姿、いとよろしくみゆ。左は社壇の広恵をたのみ、右は仏道の照曠なる事をなげけり。すがたとりどりなり。仍為_レ持。

【通釈】

三番

左持

実国

180 過去も現在・未来も、（賀茂の）神の広い恵みを、ひたすらお頼りしております。

右

登蓮

181 現世でも、やはり迷いから目覚めない私の心だ、——いつまで、この無明の夢路をたどることであろう。

左歌は、過去から未来にわたって神の広い恵みを頼る心が、感興深く思われます。

右歌は、「いつを限れる（夢路なるらん）」などと詠んだ姿が、大層結構に見えます。左歌は社殿の神の広い恵みを頼り、右歌は仏道がきわめて明らかなることに関して迷い続ける身を嘆いている。

歌の姿はそれぞれ特色がある。そこで持とする。

【注】○**ならのはのひろきめぐみ** 「ならの葉」は広いので「広き恵み」の修飾に用いた。上賀茂神社の撰社の奈良社、またその前を流れる「ならの小川」の意識があると見るのは、用例上早すぎるかもしれないが、この歌合が上賀茂神社に奉納されるものである以上、ここではその社の神の広い恵みを言ったと見てよいであろう。○**おどろかぬ心** 仏教の立場から、正しい悟りに目覚めない心を言う。○**夢ぢ 夢路**。夢の中の道の意だが、ここでは前の「おどろかぬ」に関連して、正しい悟りを得ず迷いから覚めない人生行路を言ったものであろう。○**以往 過去**。○**社壇 社殿**。○**照曠** 「極めて明かなこと」〔大漢和辞典〕。また「照らしかたの広いこと」〔新釈漢文大系〕とも言われる。『莊子』（天地）に、「上神乘_レ光、與_レ形滅亡、此謂_二照曠_一。」とある。

【考察】左の歌は、過去・現在・未来を通じて専ら神の恵みを頼りに思う由を詠む。「ならの葉の広き恵み」は、「注」で触れたが、この場合上賀茂神社の神の恵みを意識したものであろう。

右の歌は、現世でもなお迷いから覚めない心を省みて、一体いつまでこの迷いの夢路をたどることかと嘆いた作と思われる。「この世にも」と言うのは、前世・現世・来世と続く長い時間を意識してのことであろう。

俊成の判詞は、左歌については、過去・現在・未来を通じて神の広い恵みを頼りとすると詠んだ心が、「をかしく」見えると評する。また右歌については、「いつを限れる夢路なるらん」と迷い続ける身を嘆いた姿を、「いとよろしく」見えると評する。そして左右の歌を「姿とりどりなり」と見て持としている。

左の歌は神に関して、右の歌は仏道に関して、それぞれ自身を省みて詠んでいるのだが、いずれも長い時間にわたる自身を意識している。俊成の判詞もそういう点を認めた上での批評のように思う。

四番 左勝

四 畠はやぶる神のめぐみにかげなびく位の山にのぼる身となせ

右

俊 恵

128 みたらしや清きながれにいくしたて心のあかをいかですすがん

左、神のめぐみにかげなびくとおける文字つづき、いとをかしくこそ侍れ。

右は、みたらし川に心のおかをあらはんこと、さらでありぬべくや。心性水澄みなば業障のあかあらはれぬべし。みたらし河の流にも無便やあらん。以^レ左為^レ勝。

【通釈】

四番 左勝

時 忠

129 神の恵みとして、私を、「影なびく(星の)位」に、(内大臣の地位に)昇らせてください。

右

俊 恵

130 御手洗川の、清い流れに斎申を立て、心の汚れをどうかして洗い流そうと思います。

左の歌は、「神の恵みに影なびく」と言った言葉続きが、大層面白く思います。

右の歌は、御手洗川に心の汚れを洗い流すと言っているが、これは不適當かと思う。心が本来のままに澄んだなら、悪業による道の障害という汚れは洗い清められるに違いない。御手洗川の流れるに、(そういう汚れに關して用いられるのは)不都合なことであるかと思う。左の歌を勝とする。

【注】○ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。○かげなびく位 「影なびく星の位」のことで、内大臣の地位を言う。公卿・殿上人を雲上人として「星の位」と言うが、その中で太政大臣・左大臣・右大臣の三公を三台星にあてはめ、これに転ずべき地位である内大臣に対して「影なびく星の位」の異称を用いた。○位の山にのぼる 位が昇進することを、山に登るのに例えて言う。○みたらしや清きながれ 御手洗川

の清流。「御手洗川」については三番の「注」参照。○いくし 斎申。

榊や小竹に麻や木綿をかけて神に供えたもの。○心のあか 心の汚れ。煩惱。○業障 ごうしょう、または、ごっしょう。仏教用語で、悪業によって生じた障害。○無便やあらん 「無便」は、便なく。不都合なことであるか。

【考察】左の歌は、「注」で触れたように、「影なびく位」の語で内大臣の地位を示し、神の恵みで自分をその地位に昇進させてほしいと願っている。ちなみに作者の平時忠は当時四十九歳で従二位権中納言(兼中宮権大夫・左衛門督)であったが、その妹たちが八条の二位(清盛の室)、建春門院(後白河天皇の女御、高倉天皇の母)であったので、『平家物語』にも「兼官・兼職思ひのごとく、心のごとし」(平大納言被流)などと言われている。それで正二位権大納言まで昇進したが、壇の浦の戦いで捕らえられ、能登に流された。

右の歌は、御手洗川の清流に斎申を立てて、「心のあか」を洗おうと詠む。御手洗川は二番右歌などの場合と同様、上賀茂神社の境内の川である。

俊成の判詞は、左歌については、第二句から第三句にかけての「文字つづき」を「いとをかし」と評価している。これは「かみのめぐみにかげなびく」と続く句の、頭韻などの声調に注目したものかと思う。

右歌については、御手洗川で「心のあか」を洗うとする着想を問題視し、悪業による道の障害という「心のあか」は、人間本来の澄んだ心を取りもどすことで洗い清めるべきもので、御手洗川によるのは適當でない旨を述べ、対する左歌を勝としている。

五番

左

成 範

131 ひろまへにうゑてしたねのくちせずは思ふ事なき身とぞ成るべき

右勝

通 親

132 みかさ山峰つづきなるあとをみてのぼらん道の知るべせよ神

左歌、心をかしくこそ侍るめれ。但うゑけんたねや、すこしおぼつかなく聞え侍らん。

右歌、末の句のかみ字ぞいかにぞや聞え侍るやうなれども、歌はさのみぞ侍るべき。累葉数代の嶺つづき、のぼらむみちのなどいへる、尤しかるべし。右の勝とや申すべからん。

【通釈】

五番 左

成範

129 神の御前に植えた種が、朽ちずに育つなら、(やがて実を結び、)私も心がかりのない身になるに違いありません。

右勝

通親

130 みかさ山の名のある(近衛の将官の)職を代々務めた先例を見て、より高く進もうとする道を、神よ、導いてください。

左の歌は、着想が面白い作のようです。ただし、植えた種というのが、少々あいまいなものに思われるでしょうか。

右の歌は、下の句に「神」の言葉を用いたのが、どうかと思われるようですけれど、歌はただそう詠むべきものなのでしょう。代を重ねて数代にわたる家系を「峰続き」とし、それを受けて「登らむ道の」などと詠んだのは、まことにふさわしいと言えるでしょう。右の歌の勝と申すべきであろうかと思えます。

【注】○ひろまへ 神の御前。社殿の前庭。○みかさ山 ここでは近衛の大将・中将・少将などの異名。天皇の御かさとなって身近く警衛することによる異名と言われる。○峰つづきなる跡 「峰つづき」は、前の「みかさ山」の縁でこう言うが、作者源通親に至る家系の人々は代々近衛の将官を務めた経歴をもっており、その先例を指すものと思われる。○累葉 代を重ねること。

【考察】左の歌は、神前に植えた種が無事に育てば「思ふ事なき身とぞなる」であろうと詠む。「身となる」は、植えた種の縁で「実となる」(結実する)を掛けたと見られる。ただ「植えてし種」というのは比喩であろうか、俊成の指摘するとおり疑問が残る。

右の歌は、「注」で触れたように、「みかさ山」の異名で呼ばれる近衛の将官の職を、代々務めてきた先例を見て、今後進もうとする道を、導いてくださいと神に願ったのであろう。「みかさ山」「峰つづき」「登らん道」など、山に関する縁語を織りこんでいる。

俊成の判詞は、左歌については、着想は「をかしく」思われるが、植えた種というのは「少しおぼつかなく」見えると指摘する。

右歌については、歌の最後に「神」の言葉を置いた点が問題になりそうだと上で、しかし「歌はさのみぞ侍る」と言う。これは、天の川なほしろ水にせきくだせ天下ります神ならば神(『金葉集』六二五、能因)

のような先例があることなどを顧慮したものであろう。そして右歌が代々近衛の将官を務めた家系を「みかさ山峰つづきなる」と言い、その山の縁で「登らん道の」などと詠んだ点を、「尤しかるべし」と評価し、勝としている。

六番

左勝

雅頼

131 子を思ふ道をぞいのるすべらぎにつかふるあとをたがへざらん

右

公重

132 うき身には老いにおけるこそかなしけれわかくはたのむこともあらまし

左、つかふる跡をといへる心すがた、よろしくきこえ侍り。ころのやみはげにすがたき事に侍るべし。
右、かのしたがふが、年わかくなければつかへずとかける、思ひいでられて、さる事とはきこえ侍れど、わかくはたのむといへるすがた、むげにかたき事にぞみえ侍る。左の勝とすべし。

【通釈】

六番

左勝

雅頼

131 子を思ふ道として祈る、——みかどにお仕えしてきた代々の先例を、(わが子も)大事に守ってほしい。

右

公重

〽この憂き身にとつては、老いたのが悲しい、——若ければ、頼りに思うこともあるだろうが。

左の歌は、「仕ふる跡を（たがへざらん）」と詠んだ心や姿が、結構に思われます。親の子への愛にひかれて迷う心は、まことに捨て難いものであるうと思ひます。

右の歌は、あの源順が、「年若くはなければ仕へず」と書いていたことが思い出されて、もっともなことは思われるのですが、「若くは頼む」という風に詠んでいるが、至極困難なことと見られます。左の勝としよう。

【注】〽子を思ふ道 この言葉を用いた歌として、「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」〔後撰集〕一一〇二、藤原兼輔が名高い。〽すべらぎ 天皇。〽心のやみ 道理を見失った心の状態を、闇に例えて言う。この場合は前記の「注」の兼輔の歌に詠まれている、親が子への愛のため理性を失った心の状態。〽したがふ 源順。九一一―九八三。〔後撰集〕の撰者の一人で、和歌、詩文に才能を示したが、官途は不遇で、晩年ようやく従五位上、能登守に至っており、その作品には身の不遇を嘆くものが目立つ。ただここで判詞に記される「年わかくなければつかへず」は、出典未詳。

【考察】左の歌は、藤原兼輔の、

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
〔後撰集〕一一〇二

の歌の言葉借り、親の「子を思ふ道」として、みかどに代々仕えてきた先例を、子が忠実に守ってほしいと祈る旨を詠む。

右の歌は、老いた身を悲しみ、若ければ頼りに思うこともあるうかと詠む。

俊成の判詞は、左歌については、下句「仕ふる跡をたがへざらん」と詠んだ心・姿を「よろしく」思われると評し、親の子を思ういちぢな愛情を認めている。

右歌については、老いを嘆く心を認める一方、「若くは頼む（こともあらまし）」と詠んだのを問題視する。「むげにかたき事」に見える」と評しているが、どういう意味であろう。若返ることは到底実現し難いので、こういう言い様は無用のものと言うのであろうか。

七番

左勝

〽くろかみに霜のおくまでよにふれど心とけたる春のなきかな

右

師光

〽おのづから神のめぐみを待ちみずは何に心をかけてすぎまし

左歌、霜のおくまで、心とけたるなどいへるすがた、をかしくこそ侍れ。

右歌、さる事ときこえて、あはれにこそみえ侍るを、詞にことなるよそふるところなくやあらむ。左の勝と申すべきにや。

【通釈】

七番

左勝

実綱

〽黒髪に霜が置く（白髪になる）まで、この世を過ごしたけれど、心の解けた人生の春はなかったと思う。

右

師光

〽たまたま与えられる神の恵みを、待つてみることに外には、何に望みをつないで世を過ごそうか。

左の歌は、「霜のおくまで」（と言ったのに応じて）「心とけたる」などと詠んだ歌の姿が、まことに面白いと思ひます。

右の歌は、もっともなことと思われて、心をうたれる作と見られますけれども、言葉の面で特に工夫した点はないように思う。左の勝と申すべきでしょう。

【注】〽心とけたる春 心の晴れた人生の春。「春」は勢いの盛んな時期、得意の時として言う。〽よそふるところ 飾り整えるところ。

【考察】左の歌は、黒髪が白髪になるまで過ごしてきたが、心の晴れる人生の春はなかったという感慨を詠む。上二句に、黒髪が白髪にな

るのを霜のおくのに例えた言い様は、

ありつつも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜の置くまでに
『万葉集』八七、磐姫皇后（いわひめののおおきま）

の歌から取り入れたものかと思うが、下の句の「心とけたる春のなきかな」という表現は、「霜のおく」のに対応して「とけたる春」の語を用いる工夫がされている。そういう修辞技巧の巧みさを特色とするところがある。

右の歌は、たまたま神の恵みとして与えられる好運を期待する外には、世を渡る上での希望などもてない、と嘆いたものであろう。これは左歌に見られるような修辞技巧を用いず、端的に詠まれている。

俊成の判詞は、左歌については、「霜のおくまで」に対して「心とけたる」の語を用いた歌の姿を、「をかしく」と評価する。

右歌については、もっともと思われ、「あはれ」に見えるところを一方、言葉の面で「ことなるよそふるところ」がないとし、左の勝と判定する。左歌の修辞技巧の巧みさが目立ったために、そういう言葉の技巧を用いない右歌が負けたように見える。

八番

左勝

実守

155 位山はなを待つこそ久しけれ春の宮こに年をへしかど

右

大輔

156 御手洗や清きながれにわたすらん数にはもれしみくづなりとも

左歌、花をまつこそひさしけれといひて、春の宮こに年をへしかどといへば、心（心）すがたまことに宜しくも侍るかな。

右歌、おもふ心優には侍れども、位に心うつりて、汀のみくづ思ひわかず侍るなるべし。仍以左為勝。

【通釈】

八番 左勝

実守

155 位が上がり、花咲く身となるのを待つことが、久しくなった、——春の宮（東宮）に仕えて、年を経ただけれど。

右

大輔

156 御手洗川の清く流れる社の神は、救ってくださいさるであらう、——人の数から外れた水屑のような（わが）身であつても。

左の歌は、「花を待つこそ久しけれ」と言った上で、「春の宮こに年を経しかど」と詠んでいるので、心も姿もまことに結構に思われます。

右の歌は、その発想は優美とは思いますが、地位に気をとられて、水辺の水屑同然の身として分別を失ったところがあるようです。そのため左を勝とする。

【注】○位山 四番の「注」参照。○はなを待つ ここでは人生での花開く時、栄える時を待つ意。○春の宮こ 「宮こ」の「こ」は場所の意で、「春の宮」と同じ。東宮御所。○御手洗 御手洗川。二番の「注」参照。○わたす 神仏が人を救うことを、川を渡すことになぞらえて言う。そういう先例に、「思ふことなる川上にあとたれて貴舟は人をわたすなりけり」（『後拾遺集』一一七七）がある。○みくづ 水屑。水中のごみ。○数にはもれし 『新編国歌大観』歌合編では「数にはもれし」と読まれている。これに対して『新校群書類従』や『平安朝歌合大成』では「数にはもれし」と読まれている。『新編国歌大観』でも私家集編Ⅰ所収の『殷富門院大輔集』の一首は、やはり「数にはもれし」とされている。「もれし」でも「もれし」でも、一首の解釈はそれぞれ可能かと思うが、前記の「通釈」は「もれし」として記した。

【考釈】左の歌は、官位が昇進して人生の「花」咲く時が来るのを、待つことが久しい、「春の宮こ」（東宮）に仕えて長くなる身だが、との心を詠む。人生の「花」と「春」の宮とを修辞上対応させて見所としている。

ちなみに、左歌の背景になっている作者の実守の状況は、一首が『千載集』に収められた際の次のような詞書から、やや具体的に知ることが出来る。

高倉院春宮の御時、権亮に侍りけるを、参議にてほど侍りけるころ、賀茂社歌合とて人々よみ侍りけるに、述懐のうたとてよみ侍りける(一〇七六詞書)

作者の実守は、仁安元年(一一六六)春宮権亮になって、同三年の高倉天皇即位まで務め、嘉応二年(一一七〇)参議正四位下、承安二年(一一七二)従三位、翌年正三位と昇進したが、別雷社歌合の催された治承二年(一一七八)には、三十二歳で参議正三位のままであった。それで実守は、春宮に仕えたところからの経歴を顧み、さらに官位が昇進して人生の花咲く時を迎えたい思いを、この一首に託したのである。

右の歌は、御手洗川の流れも清い上賀茂神社の神に救済を願う心で、川の縁から自身を「水屑」になぞらえて詠んでいるが、「注」に触れたように第四句を「数にはもれし」と読むか、「数にはもれじ」と読むか、両説があつて、解釈上の問題点となる。

「数にはもれし」と読めば、一首は三句の後で切れて、「通釈」のように解釈されると思う。それに対して「数にはもれじ」と読めば、一首はこの第四句で切れて、次のような大意の歌と解されると思う。

御手洗川の清く流れる社の神が、救ってくださいさる、人の数には入りたいたいと思う、——水屑のような(わが)身であっても。

この二種の解釈は、いずれかが勝ると言えるであろうか。

俊成の判詞は、左歌については、上句に官位の昇進による人生の「花」を待つのが久しい旨を言ったのに応じて、下句で「春」の宮に仕えて年を経たがと詠んだ点を評価し、「心姿ことに宜しく」思われると記している。

右歌については、着想は「優」と評価する一方、「位に心うつりて、汀の水屑思ひわかず」と批判したと読みとられる。この批判の言葉は少々分かりにくいだが、作者自身の地位にこだわって、神の救済が万人に平等である点を見失っていると指摘したものであろうか。

【備考】八番左歌は『千載集』(一〇七六)に収められている。

九番

左持

187 思ひきやもちふたたびまゐりきてみしなの国のきはむべしとは

右

成仲

188 八そちまで神のめぐみのたわまねば後の世も猶たのもしきかな

左歌、意趣よろしくこそ侍るめれ。今生世随_二昇進_一掃望_二弥不_一尽者也。しかるに、みしなの国のきはむべしとはといへる心実正直之儀也。定神感歎。

右歌、八句暮齡雖_レ傾、七社之壇無_レ嬾。今生之宿縁已爾。後世之引導何疑はん。たのもしきなどいへば尤可_レ然か。

但、左のまゐりおきてといへる、いささか俗にちかく、右のたわまねばとおける、ことなるよせなくやあらん。しかれどもかの劉子之中、驚馬有_二驥之一毛_一、不_レ可_レ得_レ為_レ驥、竜有_二蛇之一鱗_一、不_レ可_レ得_レ為_レ蛇、大徳可_二以掩_二小瑕_一、小火為_二能潤_二枯旱_一といへるがごとく、いささかの不足なりとも、大意おのおのよろし。よりて持とすべし。

【通釈】

九番

左持

永範

187 思ひもしなかつた、——百度参りを重ねてして、それで三位の地位まで至り得ようとは。

右

成仲

188 八十の年になるまで、神の恵みが衰えないので、次の世もなお頼もしく思われる。

左の歌は、その作意が結構な作のように思います。一体この世では、(官位が)昇進するにつれて、新しい出世の期待が次々に起こつて尽きないものだ。ところが一首に「三品の国のきはむべしとは」(思ひもしなかつた)と詠んだ心は、まことに素直で正しいものである。さだめて神も感心なさるであろうかと思う。

右の歌は、八十歳になるまで年をとつても、七社の神の恵みは衰えないと言う。現世における前世からの因縁が、すでにそうなっ

ているのだ。来世において（神仏の導きで）救われることは、疑う余地がない。（後の世が）「たのもしき」などと詠んでいるので、これはいかにも当然のことかと思われる。

ただし、左の歌で「参りおきて」と言っているのは、少々俗に近く、右の歌で「たわまねば」と言っているのは、別に縁語をもたない表現であろうかと思う。しかし、あの劉子の言葉の中に、「驚馬は、駿馬の毛を一筋もっていても、駿馬とすることはできない。竜は、蛇のうろこを一枚もっていても、蛇とすることはできない。偉大な徳があれば、小さな欠点は隠される。小火は、水の枯れたところを潤すことにながり得る」と言っているように、わずかな欠点があるとしても、二首は大意がそれぞれ結構である。そのため持しようと思う。

【注】「ももちふたたびまゐりきて『平安朝歌合大成』では「百千二度まゐり来て」とされるが、「もも」の後の「ち」は、数詞に添えて数を数えるのに用いる接尾語と見たい。「ももちふたたびまゐる」とは、百度参りを重ねてする意味であろう。官位昇進を願って賀茂社に百度参りをするのは、『長秋詠藻』四六九の歌の詞書にも、三位になった俊成がかつて賀茂に「百度詣」をした思い出として記される。

○みしな 三品。三位の位を言う。前項に挙げた『長秋詠藻』の詞書でも、三位を「三品」と記している。○たわまねば ゆるまないの。

○後の世 前世・現世に対する後世。来世。○掃望 「想望」のこと、期待することを意味する語であろう。○八旬の暮齡 八十歳の老齡。「旬」は十年を一期とする単位。○七社 今の天津市坂本にある日吉神社で、本宮・摂社・末社を合わせた二十一社を、上中下の七社ずつ三つに分けて言う。山王七社。右歌の作者の祝部成仲は日吉神社の禰宜を務めた。○壇無禰 「壇」は、ここでは神を祭る祭壇。「禰」は、弱弱しい様子などを表わすのに用いる漢字。壇上に祭る神の威光や利益が衰えない状態を言ったのである。○今生の宿縁 現世における、前世からの因縁。○已爾 已に爾り。すでにそうである。

○引導 神仏が人を導いて救うこと。○劉子 『平安朝歌合大成』は乙本本文に「剝子」として挙げ、「剝子未詳、或は劉子か。諸子百家の中の一書であろうが、俊成のよく引用する列子・莊子・韓非子等にこの本文は見あたらない」とされる。「劉子」は、古代中国の典籍を種々採って編まれた書で、十卷、唐書芸文志に初めて記載される。編者未詳。○驚馬 足ののろい馬。○驥 一日に千里を走るといふ良馬。【考察】左の歌は、百度参りを重ねて、その利益で三位になれるとは思いがけないことだったと詠んでいる。率直な詠み様であろう。ちなみに作者の藤原永範は、文章博士永実の子で、仁安三年（一一六八）、六十九歳で従三位、承安四年（一一七四）正三位になり、治承四年（一一八〇）に出家して没している。

右の歌は、現世では八十歳になるまで神の恵みが衰えないので、来世も頼もしく思われると詠む。当時の通例に従って神仏習合思想に基づいているが、これも率直な詠み様であろう。ちなみに作者の祝部成仲は、「注」で触れたように日吉神社の禰宜を務めた。

俊成の判詞は、左歌で、作者の三位にまでなり得たことを喜びとし、「さらに昇進を求めない心を、「意趣よろしく」と評し、右歌についても、老年まで神の恵みを受けて後世を頼もしく思う心を、「尤可然か」と肯定する。そして表現に多少不足があっても「大意おのおのよろし」と評価し、持としている。

十番 左勝 経盛

100 悦のしげきやしろと聞きつれば一方ならずたのもしきかな 資隆

140 御手洗の清きながれにすすがれて心のあかは残らざらん 左、よろこびのしげきみやしろの句は、いとをかしきこゆ。

右歌、あかの事さきに申畢。以左為勝 十番 左勝 経盛

109 「賀茂」の文字どおり）よろこび事が多い、そういう社と聞いたので、とりわけ頼もしく思われる。

右

資隆

110 御手洗川の、清い流れに洗われて、心の汚れは残らず消えてほしいものだ。

左の歌で、（賀茂の字を生かして）「よろこびのしげき」み社と詠んだ句は、大層面白く思われます。

右の歌で、心の「あか」を御手洗川の清い流れで洗い流そうとすることに關しては、すでに（四番の判詞で、妥当でない旨を）申したとおりです。左の歌を勝とする。

【注】○悦のしげきやしる 賀茂社の「賀」に「悦」を、「茂」に「しげき」をあてたもの。○御手洗 御手洗川。二番の「注」参照。○心にあか 心の汚れ。煩惱。○畢 をはんぬ。動詞の連用形に付いて、動作の完了したことを示す。「終はりぬ」の変化した語。

【考察】左の歌は、「賀茂」の社を「悦のしげき」社として、頼もしい限りと思う旨を詠む。「賀茂」という漢字を好字としてとり上げる着想を眼目にした作である。

右の歌は、御手洗川の清流で「心にあか」は洗われて消えてほしいと詠んでいる。これは四番右の俊恵の歌、

みたらしや清きながれにいぐしたて心にあかをいかですすがんと、発想や用語が似ている。

俊成の判詞は、左歌については、「賀茂」の漢字を「悦のしげき」とした着想を、「いとをかしく」と評価する。右歌については、「心にあか」を御手洗川で洗い流すという着想を、先に記したとおり問題があるとしている。これは四番右歌の判詞に見られるように、「心にあか」は人間本来の澄んだ心を取りもどすことで清めるべきもので、御手洗川によるのは不適當だとしたのである。

十一番 左持

脩範

111 たぐひなく深き心をくみてしれ頼をかくるかもの川波

右

顕家

112 我が身にもうき瀬あらじとたのむかなかもの河水すまんかぎりは

左、たのみをかくる賀茂の川波といへるすがた、いひながして宜しくみえ侍り。

ただし、右は川波、河水なるを、しひてふかさあさ尋ね侍らんと、はばかりおほし。例の持とすべし。

【通釈】

十一番 左持

脩範

113 比類なく深い私の心を、察していただきたい。——お頼りする、賀茂の川波の立つあたりの社の神よ。

右

顕家

114 我が身にも、つらい時はあるまいと、頼りに思うのです、——賀茂の（社あたりの）川水が澄んでいる限りは。

左の歌は、「たのみをかくる賀茂の川波」と詠んだ姿が、言い流した詠み様で、結構に思われます。

ただし、右の歌は、賀茂の「川波」（と左歌にあるの）が「河水」になっている程度の違いなので、しいてどちらが深いか浅いかと追求しますのも、賀茂の神に恐れ多いと思う。例によって持としよう。

【注】○かもの川波 賀茂川の波を言うことで、賀茂の社の神をさりげなく示したもの。「川波」は、「深き」「くみて」「かくる」と縁語になる。○うき瀬 つらい時。○かもの河水 賀茂川の水を言うことで、賀茂の社の神を示す。「河水」は、「うき」「瀬」と縁語になる。○ふかさあさ尋ね侍らんも 「深さ浅さ」は、川の深さ浅さに寄せて、歌としての充実の程度を言う。

【考察】左右の歌は、いずれも賀茂の社の神の加護を頼む心を詠むが、社の神を直接言葉に表わすことをせず、賀茂川の「川波」または「河

水」に託して言う点で共通している。そして「川波」や「河水」に託したことから、縁語として「深き」「くみて」「かくる」とか、「うき」「瀬」とかの語を用いた点も似ている。

また、二首の末句は、それぞれ先行歌に同様の表現が見られる。先行歌として、左歌に関しては、

むかしわが祈りし道はあらねどもこれもうれしなかも河なみ
〔長秋詠藻〕四六九

右歌に関しては、

君が代はつきじとぞ思ふ神風やみもすそ川のすまむかきりは
〔経信集〕一八八、『後拾遺集』四五〇

があり、左右の歌に影響した可能性がある。

俊成の判詞は、左歌については、下句の詠み様を「言ひ流して宜しく」見えると評する。俊成はここで、前記のように同様の末句をもつ自作の先行歌を意識していたかと思う。

右歌については、俊成は歌に即した具体的な批評をしていないが、これは左歌の「川波」に寄せた詠み様と同様のものを、右歌の「河水」に寄せた詠み様に認めたためのものである。それで左右の歌は甲乙がつけ難く、しいて「深さ浅さ」の差を求めるのもいかがかと、神慮に事寄せて持としている。

十二番 左持

43 立帰りすててし身にも祈るかな子を思ふ道は神もしるらん

右

頼政

44 かみはかみしもはしもとぞ祈るべきわがねがはるるここのしなをば

左歌、思ひをすててなぎさに入りながら、猶心のやみははれがたくして、かさねて和光の所をたのめるなるべし。

右歌、ひとへに往生の望なり。尤なり。宿因にまかせて雖三下品（足りぬと思ふ事に待てるを）「とぞ思ふ事に待てるを、上には上輩に列せん事をいのり、

下には下品に生ぜん事をこのみねがはん事やいかが。勝負不三分

明。神慮にまかすべし。

【通釈】

十二番 左持

積阿

43 (俗人の) 昔にもどり、出家した身ながらわが子のことを祈る、
——子を思う道に迷うのは、神も御存じであろう。

頼政

44 上位の人は上品を、下位の人は下品をと、浄土の往生を祈るがよい、——私の心から願う九品浄土(への往生)を。

左の歌は、俗念を捨てて仏門に入りながら、なお(子を思う)心の迷いは晴れるに至らず、さらに仏の化身である神にすがった心の作であろう。

右の歌は、ひたすら浄土への往生を願う心を詠む。もっともなことである。ただ、往生は、前世の因縁に任せて、下品でもそれで満足(足りぬと思ふ事に待てるを)すべきことと思われませんが、上位の人は上品の仲間に加わること祈り、下位の人は下品に往生することを好み願うというのは、いかがであろうか。勝負は明らかにし難いところがある。神のみ心に任せることにしよう。

【注】○立帰り 世を捨てる前の昔にもどって。「祈るかな」に続く。

○すててし身 俗世を捨てた(出家の)身。○子を思ふ道 藤原兼輔の歌に「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

〔後撰集〕一一〇二)がある。○ここのしな 九品。極楽浄土に往生する人が、生前の功德によって受けるとされる九種の階位。上品・

中品・下品に三分し、各を上生・中生・下生に細分した九種類。ここでは、その九品の浄土を示す。○なぎさ 「彼岸」のなぎさの意か。

群書類従本、歌合部類本に「桑門」とあるのによって「通釈」を記した。○和光 仏教関係の語として、仏・菩薩が威徳の光を和らげて仮

の姿を衆生の中に現すことを言った。○雖三下品 「とぞ思ふ」私菩薩が神として現れることを言った。○雖三下品 「とぞ思ふ」群書類従本、歌合部類本に「雖三下品 足りぬと思ふ」とある。『和漢

朗詠集』(巻下、仏事)にも、「十方仏土之中、以西方^レ為望。九品蓮台之間、雖^三下品^二広^レ足^一」(五九〇、慶滋保胤)と見えるので、これによって「通釈」を記した。

【考察】左の歌は、藤原兼輔の歌、

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
〔後撰集〕一一〇二

の語句を織りこんで、出家の身でもわが子のために祈ってしまう、この「子を思う道」の迷いは神もお分かりくださると思うと詠む。ちなみに作者の釈阿(俊成)は当時六十五歳、二年前に出家しており、子の定家は十七歳、従五位下の身分であった。

右の歌は、その下句「わが願はるるこのしなをば」に、作者頼政の九品浄土への往生の願いが読みとられる。この点は実定の家集『林下集』によれば、この歌合と同じ年の十二月に頼政が従三位に叙せられた時に詠んだ歌、

限りとしてこのしなのみ思ふ身はみつの位もなにかはせん
〔林下集〕三三四

にも、強い願望として詠まれている。ただ、歌の上句に、九品浄土への一般の人々の態度をとり上げて、上位の人は上品を、下位の人は下品をと「祈るべき」と言うのは、受けとり様によっては、俊成も指摘するとおり疑問が残る。これは、作者が九品浄土を全体としてとらえ、そこへの往生をひたすら願う心を言うに当たって、一般の人々が上品とか下品とかにこだわる傾向があると見て、対比的に言ったものと解したいが、いかがであろう。

俊成の判詞は、自作の左歌については、俗念を捨てて出家した身ながら、子ゆえの心のやみに迷って神にすがるという作意のみを記している。

右歌については、「ひとへに往生の望なり。尤なり」と、下句の心を肯定する一方、上句で人の地位により往生の望みが上品と下品に分かれるとする点を疑問視している。しかし自作の左歌とつがえられた

歌である点を配慮したものか、勝負の判定を避けている。

【備考】十二番左歌は『新後撰集』(七六七)に収められている。

十三番

左持

静賢

15 ことに出でていはばかしこしいはでただのむ心は神にまかせん

右

季経

16 うき世には底のみくづと成りぬともやがてしづむなかも河水

左、いはばかしこしいはでただといへる姿、をかしこそ侍れ。

右、そのみくづと成りぬともと言ひ、やがてしづむなといへる心、また宜しくみゆ。猶持とすべくや。

【通釈】

十三番

左持

静賢

15 言葉に出して言えば、おそれ多い。——神を頼る私の心は、言わずにただ、神のおぼしめしに任せよう。

右

季経

16 憂き世では、水底の水屑のようになりはてても、沈んだ身のままに

しないでください、賀茂川にゆかりの神よ。

左の歌は、「言はばかしこし言はでただ」と詠んだ姿が、まことに面白いことです。

右の歌は、「底の水屑となりぬとも」と言っておいて、「やがて沈むな」と言った心が、また結構に思われる。この勝負もやはり持とすべきかと思う。

【注】○みくづ 水屑。水中のごみ。○しづむな この場合の「しづむ」は他動詞。水に沈める意に、沈淪した状態におく、世に埋もれさせる意を兼ねて言う。○かもの河水 賀茂川の水を言うことで、賀茂の社の神を示す。十一番左歌の「かもの川波」と同様の表現。

【考察】左右の歌は、ともに神の加護を頼む心だが、左の歌は、その心を言葉に出せば神におそれ多い、言わずにおいて神のみ心に任せようと詠んでいる。二句の「言はばかしこし」から「言はでただ」の三

句へ続けた言葉の運び様は、抑揚のきいたリズムミカルな表現であろう。なお、一首は、

ことに出でて言はぬばかりぞ水無瀬川したに通ひて恋しきものを
〔古今集〕六〇七、紀友則〕

あたりから語句を借りているかもしれないが、歌の趣は異なる。

右の歌は、神の加護を祈る心を川水に託して詠む。憂き世で「底の水層」のような身になっても、「やがて沈むな」と、「賀茂の川水」にゆかりの神に祈っている。なお、この一首も表現の上で、

なみだ川底のみくづとなりはてて恋しき瀬々に流れこそすれ
〔拾遺集〕八七七、源順〕

などから影響を受けているとも思われるが、歌の主題は異なる。

俊成の判詞は、左歌については、二句から三句へ続けた言葉運びを「姿、をかしく」と評し、右歌については、川水に託して神の加護を祈った心を「宜しく」と評し、持としている。

【備考】十三番左歌は『新統古今集』神祇歌（二〇九九）に収められている。また十三番右歌は『新統古今集』雑歌（一九一七）に収められている。

十四番

左持

範 玄

47 つもりゐて心をけがすちりひぢもみたらし河にすすがざらめや

右

経 家

48 我がたのむ其神山のかひあらばなどかさかゆく時もなからん

ささぎさきもすぐ歌どもみえ侍る中に、見え侍り侍る中に（群書類従）歌合のちりひぢは、さても侍りなん。つもりゐてなどいへる五文字、あしからずきこゆるべし。

右の歌、などかさか行くなどいへるも、さる事とみゆ。又持なるべきにや。

【通釈】

十四番 左持

範 玄

『別雷社歌合』注釈（三）

47 幾重もたまつて、心を汚す塵や泥のようなものも、御手洗川で洗い流してしまおう。

右

経 家

48 私のお頼りする、賀茂の社の神の御利益があれば、（わが家の）栄えてゆく時もあるに違いない。

前にも、心のおかを御手洗川で洗い流す歌が見えました中で、（左歌の詠み様を見ると）、歌合に「ちりひぢ」と詠んでいるが、それはそれでもよいのでしよう。「つもりゐて」などといった五文字の句は、わるくないと思われはすだ。

右の歌で、「などかさか行く（時もなからん）」などと詠んだのも、もっともなことと思われる。この勝負も持とすべきものかと思う。

【注】○ちりひぢ 塵と泥。○みたらし河 二番の「注」参照。○其神山 上賀茂神社の背後にある「神山」の異称。『八雲御抄』名所部には「自中古或加其字」とある。「其神山」として詠む場合は、当時、往時の意の「そのかみ」を掛けることが多いが、ここでは別にその意識は見えないようだ。○さかゆく「栄行く」で、栄えてゆく意であるが、ここでは同音の「坂行く」をにおわせて「其神山」の縁語にしたのであろう。

【考察】左の歌は、心を汚すものを御手洗川ですすぐことを詠む点で、前に出ていた歌、

御手洗や清き流れにいくし立て心のおかをいかにすがん（四番 右、俊恵）

御手洗の清き流れにすすがれて心のおかは残らざらん（十番右、資隆）

などと同様の発想の作であるが、心を汚すものを「つもりゐて心をけがすちりひぢ」とした点は独自性がある。すなわち、心を汚す煩惱は心に本来備わるものでなく、心に一時的に付着した塵のようなものと思われ、見る仏教の「客塵煩惱」の考えが精確に詠まれていると思われる。

右の歌は、「其神山」の語で上賀茂の社の神を示し、その神の御利

益があるなら、わが一門の榮えてゆく時があるに違いないと詠む。修辭の面では「山」の縁語として「かひ」（峽）、「さかゆく」（坂行く）を織りこんだ作であろう。ちなみに作者の経家は、その属する六条藤家の歌壇での勢力が衰え気味であったところから、「榮行く」ことを願う思いを詠んだのであろうと推測される。

俊成の判詞は、前半が左歌に対する批評であることを明記しないが、前にも「すぐ歌ども」が見えたことを言い、「ちりひぢ」「つもりて」などの語を用いたことに触れて批評している。「ちりひぢ」「つもりて」などの語は、前出の「すぐ歌ども」（四番右、十番右）にはない左歌独自の用語で、その使用に対して俊成は肯定する見解を記している。これは基本的には、前述のように、これらの語を用いて仏教の客塵煩惱の考えが精確に伝えられた点を、俊成が評価したものであろう。

右歌については、賀茂の神の加護があれば「榮行く」時があるはずだと詠んだ点を、「さる事と見ゆ」と認め、持としている。

十五番 左持

頼輔

19 数ならで老いぬとなにか歎くべき三のたのしみある身なりけり

右

道因

19 昔わがいつきの宮につかへしを神もあはれと思ひいでずや

左、榮期が三樂の心よろしくこそ侍るめれ。怨_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}背者不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}退_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}性也、傷_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}達者不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}知_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}命也とこそいひて侍るめれ。三の樂ある身なりけりといへる、可_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}謂_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}知_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}運命_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}矣。

右は、在昔のいつきの宮の奉公を思ひて、今日当社の述懐にいだせり。両首の心ざしともよろしくみゆ。仍_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}爲_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}持。

【通釈】

十五番 左持

頼輔

19 とるに足りぬ身で老いたと、嘆くことはない、——（人で、男で、長生きするという）三つの楽しみのある身なのだ。

右

道因

19 昔、私が齋院にお仕えしたことを、（賀茂の）神も、いとおいしい者として思い出してくださいださらないだろうか。

左の歌は、榮啓期の挙げた三つの楽しみを詠んだ着想が、結構なように思えます。「怨_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}背者不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}退_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}性也。傷_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}達者不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}知_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}命也。」と言われているようです。左歌で「三つの楽しみある身なりけり」と詠んだのは、人の運命を知るものと言うべきである。右の歌は、昔齋院にお仕えしたことを思っ、今日この賀茂の社の歌合の述懐の歌に出したものである。この左右二首の趣意は、ともに結構に思われる。そこで持とする。

【注】○三のたのしみ 人生における主な三つの楽しみ。ここでは『列子』に見える、榮啓期の挙げたという三樂で、人に生まれ、男に生まれ、長生きをするという三つの楽しみを指すと思われる。榮啓期は、古代中国の春秋時代の人。『列子』（天瑞）によると、孔子の問いに答えて榮啓期の挙げた人生の楽しみは、次のように記されている。「天生_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}万物、唯人為_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}貴。而吾得_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}為_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}人。是一樂也。男女之別、男尊女卑。故以_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}男為_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}貴。吾既得_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}為_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}男矣。是二樂也。人生有_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不見_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}三日月、不免_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}三襁褓_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}者。吾既已行年九十矣。是三樂也」。なお、この榮啓期の三樂をとりあげ、酒に酔う楽しみを加えて四樂とする白居易の詩句が、『和漢朗詠集』（酒、四八四）に収められている。○いつきの宮 伊勢神宮や賀茂神社に奉仕するために遣わされる未婚の内親王（齋宮・齋院）の居所。ここでは賀茂神社に奉仕する齋院の場合と思われる。

○榮期が三樂 「三のたのしみ」の項に記した榮啓期の挙げる三つの楽しみ。○怨_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}背者…… 出典未詳。この本文の返り点は『新校群書類従』によった。『平安朝歌合大成』では「怨_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}背者…… 傷_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}不_{（定り点、新校群書類従ニヨル）}達者……」とされる。○在昔 むかし。

【考察】左の歌は、数ならぬ老いの身を嘆くことはないとい詠み、その根柢として「三のたのしみ」をもつ身であることを挙げる。「三樂」とされるものは数種あるが、「注」で触れたように榮啓期の三樂が

『和漢朗詠集』などによっても当時広く知られ、また長命を楽しみの一つに数える点で左歌の上句の内容によく対応するので、俊成が判詞に言うとおりに、そう見てよいと思われる。

右の歌は、作者がかつて賀茂の齋院に仕えた身であることを挙げ、そのことを賀茂の社の神も「あはれと思ひいはずや」と詠む。左の歌が、榮啓期の三葉を歌の眼目として取り入れているのに対して、右の歌は、作者自身の経歴を詠み入れているが、ともに平明な詠み様で、作意の明らかな点は同様と見られる。

俊成の判詞は「兩首の心ざしともよろしく見ゆ」と評し、持している。

十六番 左

畠今よりは秋のをしかのふた毛をもわがもとゆひのよそにやはみる
右勝 隆房 親宗

畠すべらぎを千代の春とぞ祈りますわが行末に花やさくとて

左者思_二朝_一二毛之齒、右者祈_二聖代千載之春_一。歌品雖_レ等、意趣_{意趣}之_之「_{群書類従}」、仍以_レ右為_レ勝。

【通釈】

十六番 左

畠元結_{もとゆい}で束ねるわたしの髪に、白髪_{しろが}がふえたと知り、これからは秋の雄鹿の二色の毛も、よそ事でなく見ることになる。

右勝

親宗

畠天皇のみ代が、千年の春を重ねられるようにと、お祈り申し上げる、私の将来に、花が咲く時があるかと思つて。

左の歌は、朝ごとに白髪の交じるのを見る年齢になったことを思つて詠み、右の歌は、聖天子の治世が千年の春を重ねることを祈つて詠んでいる。歌の程度は同等と思ふけれども、右の歌は趣意_{意趣}が天皇の御治世を祝う心によつて異なる。そのため、右の歌を勝とす。

【注】○ふた毛 二毛_{ふたげ}。鹿の毛が季節によって異なる色を加えること。夏は赤みを加え、秋は少し黒みを帯び、冬には赤みを失うという。○もとゆひ 元結_{もとゆい}。髪を(もとどりとして)結び束ねる糸、ひも。○すべらぎ 天皇。○祈ります この「ます」は「まうす」の変化した語。お祈り申し上げる。○二毛之齒 「二毛」は、白髪交じりの髪。「齒」は年齢。白髪の交じる年齢。○意趣之 「」 群書類従本、歌合部類本では「意趣依祝心」とする。当面これによって「通釈」を記した。

【考察】左の歌は、白髪の交じる「二毛」の年齢になったのを知るにつけ、今後は秋の鹿の「ふた毛」をよそ事に見過ごせなくなつた旨を詠む。「二毛」の語は漢詩文に古くから見えるが、いま白居易の詩句で『和漢朗詠集』(早秋、二〇八)に収められたのを引くと、

但_た喜_喜暑_暑随_随二_二伏_伏一_一去_去

不_不知_知秋_秋送_送二_二毛_毛一_一来_来

とある。秋の訪れとともに「二毛」に老いを嘆く心がうかがわれるが、左の歌は、秋の鹿の「ふた毛」に思いを及ぼした点に、着想上の新しい工夫があるのであろう。

右の歌は、天皇の「千代の春」をお祈り申し上げるといふ趣旨の上句に言い添える形で、下句に、自分の行く末に「花や咲く」と期待する心を詠む。縁語を生かす趣向を工夫した作であろう。

俊成の判詞は、左右の歌を「歌品」の点では等しいとするが、左歌が天皇の治世の「千代の春」を祈る心をもつ点で勝と判定している。

【備考】十六番右歌は、『玉葉集』賀歌(一〇五八)に、第三句「祈りつる」の形で収められている。

十七番 左持

人_ななみの_{有房集}にゆられありきのはただしづむみくづの身とや成りなん
右 有房 経正

畠昔よりおもふ心にあるものを御手洗川のくみてしらなん
左歌、波にゆられてははしづむなどいへる心、をかしく侍り。

右歌、又そもナン（群書類従）思ふ心ありてみえ侍れば、持とすべし。

【通釈】

十七番 左持

有房

鄙人並みに、波に揺られるように右往左往したあげく、ただ沈む水層同然の身となりはてることだろうか。

右

経正

以前から思っている、この心の内にあるものを、（賀茂の社の神よ、御手洗川の水をくむように、くみとって知ってほしい。

左の歌は、（身の上のことを）「波にゆられ」て「はては沈む」などと詠んだ心が、面白く見られます。

右の歌も、（深く）思う心がうかがわれますので、持としようと思う。

【注】○人なみに『有房集』では「人並みの」。「人並み」に「波」を掛ける。○みくづ 十三番の「注」参照。○御手洗川 二番の「注」参照。

【考察】左の歌は、時世に流されるように生きて、はかなく終わる自己の姿を客視し、自嘲する趣がある。修辭の上では、俊成の判詞に言うとおり、時世の「波にゆられ」て生き、「しづむ水層」のような身となって終わるといふ、上下句にわたる川水に関する比喩に特色が見られる。

右の歌は、前から心中深く思うところを知ってほしいと願う求める作意であろう。その、願う求める相手は、一首が賀茂社に奉納されたものであり、御手洗川が詠みこまれていることから、賀茂の社の神と見てよいのであろう。

俊成の判詞は、左歌については、前記のような比喩を用いて表現した発想を、「をかしく」と評価する。右歌については、思う心の深さを認めたよう、持としている。

十八番 左持

忠度

55 ひとすらに祈るにあらず恨みかねそむきはつべきよもしらせよ

右

寂蓮

56 世の中のうきは今こそうれしけれ思ひしらずはいとはざらまし

左の歌の心ざし、いとよろしくみえ侍り。

右も、ことなるよせありてはみえ侍らねど、歌姿、文字つづきいうに侍るなるべし。仍持とすべし。

【通釈】

左持

忠度

55 いちずに（望みがかなうように）祈るのではない。——恨みにたえず、出家すべき世なら、そう知らせていただきたいとも祈るのだ。

右

寂蓮

56 世の中のつらさを知ったのは、今はうれしい気がする、——それを思い知らない、俗世をいと捨てることもあるまい。

左の歌の意向は、大層結構に思われます。

右の歌も、特に縁語などを用いたところは見られませんが、歌の姿、言葉の続け様が優美な作と言えるでしょう。そのため持としよう。

【注】○恨みかね（恨んでも）恨みきれず。○いとほざらまし 俗世をいとう（出家すること）もなからう。○よせ 寄せ。言葉の上で縁のあること。縁語関係などを言う。

【考察】左右の歌は、いずれも世をいと捨てることに触れているが、左の歌は祈りに関して出家のことをとり上げている。すなわち、自分の祈るのは世俗的な願望のみを祈るのではなく、世に背き出家すべきものなら、そのことを知らせしてほしいと思つて祈るのだという心である。

右の歌は、「世の中の憂き」ことが今はうれしく思われると言い、その理由として出離の因縁になることを挙げる。すなわち、俗世に生きたる憂さを思い知らなければ、俗世をいとい出家することもなからう。

と言っている。

左右ともに、別に修辞技巧などを意識せず、思うところを整えて表現して、おのずと独自の格調を備えた歌になっているように思う。

俊成の判詞は、左の歌については、「歌の心ざし」を「いとよろしく」見ると評価している。特に作意に月並の歌と異なるものを認めたのであろう。

右の歌については、格別の修辞技巧などは見られないが、「歌姿、文字つづき」が「優」であると評価する。作意に触れないのは、そこに別段新しさは認められなかったことであろうか。

【備考】十八番右歌は『千載集』（一一四六）に収められている。

十九番

左勝

𪛗ひろせ河底のみくづも流れつつわれよりは猶しづまざりけり

盛方

右

𪛗ねぎかくるしるしたがへでわが方にかみよりいたの名をたのむかな

顕昭

左歌、我よりはなほといへる心すがた、優にこそ待るめれ。中の五もじや、今すこし思ふべからん。

右の歌、めづらしき様には待るを、初の句より神よりいたのなどいへるすがた、不_レ被_二庶幾_一や侍らん。左猶勝に侍り。

【通釈】

十九番

左勝

𪛗広瀬川は（浅く）、底の水屑も流れていて、世の中での我が身ほど

盛方

は沈まぬと見えた。

右

顕昭

𪛗祈願に應じること利益を変えず、私の方に神が付いてくださるよう、神寄板の名を頼りに思うのだ。

左の歌は、「我よりはなほ」と詠んだ心や姿が、優れているように思われます。ただ第三句（「流れつつ」）は、今少し表現を考えるのがよからうと思う。

右の歌は、目新しい詠み様ではありませんが、初句（「ねぎかくる」）以下、「神寄板の」などと詠んだ歌の姿は、望ましくないものだろうかと思うのです。左の歌がやはり勝ると思えます。

【注】〇ひろせ河 広瀬川。大和の国の歌枕。今の奈良県北葛城郡河合町の広瀬神社の東方の曾我川か。『万葉集』の「広瀬川袖つくばかり浅きをや心深めてわが思へるらむ」（三三八一）、「古今和歌六帖」一五八一では末句「我は思はん」の形で収める。以来、浅い川として知られたようだ。〇みくづ 十三番の「注」参照。〇しづまざりけり

「しづむ」は、水中に沈む意と、沈淪する意を兼ねて言う。〇ねぎかくるしるし（神仏に）祈願するのに対応する霊験。〇たがへで『新編国歌大観』では「たがへて」とされるが、『平安朝歌合大成』の「たがへで」の読みに従い、裏切らず、ほごにせずの意と見ておく。〇かみよりいた 神寄板。神霊を招き寄せるために、たたき鳴らした杉の板。『万葉集』に「神南備の神依板にする杉の思ひも過ぎず恋のしげきに」（二七七三、柿本人麻呂歌集）の歌が見える。『基俊集』には「はふりこが神より板に引く杉のくれ行くからにしげき恋かな（六一）」が見え、後に『続後拾遺集』（八〇四）に収められる。

【考察】左の歌は、沈淪する我が身を川底の水屑になぞらえて見ていて、十七番左の有房の作などと似た点がある。けれどもこの盛方の左歌は、広瀬川の底の水屑は流れていて、我が身ほど沈みきってはいないと、自身の沈淪する様子を強調した特色をもつ。この場合、「広瀬川」は、「注」に引用した『万葉集』（三三八五）の歌に見るように、浅い川というイメージがあるので、川底の水屑が沈みきらず流れやすいことが自然に受け取られるであろう。

右の歌は、歌合で作者の属する右方に神が味方することを願う作意であろうかと思う。「神寄板」をとり入れたのは目新しいが、作者顕昭の『万葉集』の言葉を用いようとする傾向の現れであろう。ただ、上の句のいわば理詰めのような言葉運びと併せて見ると、俊成などの好んだ優艶の歌風からは離れた詠み様の一首かと思われる。

俊成の判詞は、左歌については、「我よりはなほ（沈まざりけり）」と詠んだ歌の心や姿を「優」と評価している。ただし「流れつつ」という表現は「今すこし思ふべからん」と指摘する。安易な表現と見たのであろう。

右歌については、「めづらしき様」と言い、しかし全体として歌の姿が望ましくないと評している。前述のように優艶の歌風から離れた点を批判したと思われる。

二十番 左持

隆 信

御手洗の水のみななみよにすまばさのみはかくてしづみはてじな
右 仲 綱

御神もみよ思ふ事なき人だにもたつことやすきしめの内かは

左、御手洗川によせて、よにすまばなどいへる、心ありてきこゆ。

右、たつ事やすきなどいへるすがた、をかくしきみゆ。持なるべし。

【通釈】

二十番 左持

隆 信

御手洗川の源も澄む（神の照覧される）世に住めば、格別、このま
ま沈んだ身で終わるとは限るまい。

右 仲 綱

御神も御覧ください、——心に悩むことのない人でさえ、たやすく立ち去り難い神域の様子です。

左の歌は、御手洗川に関連させて、「よにすまば」などと詠んでいるのは、思い入れていると思われる。

右の歌は、「たつ事やすき（しめの内かは）」などと詠んだ歌の姿が、面白く見える。持であらう。

【注】

○御手洗 一番の「注」参照。○よにすまば 「よにすむ」は、水が澄みきる意に、世に住む意を掛けて言う。○しづみはてじな 沈んで終わることあるまい。「沈む」は沈淪する意だが、「御手洗の水のみななみ」の縁語。○たつことやすき 容易に立ち去ることができ

る。

【考察】左の歌は、御手洗川の源の水の澄みわたることを言って、神の照覧されることを示し、そういう世であれば、沈淪した身のまま終わるとは限るまいと、神の助けを頼る心を詠んでいる。御手洗川の水の「よに澄まば」を「世に住まば」に掛けたのは、巧みな修辞である。

右の歌は、神域の様子を称賛する心を詠む作と見られるが、詠み様を、凡河内躬恒の次の歌から借りたところがあると思う。

けふのみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花のかけかは
（『亭子院歌合』四〇、『古今集』一三四）

しかしこの躬恒の春を惜しむ歌に詠み様を借りても、仲綱の右歌はまた別の趣の歌と言えるであらう。

俊成の判詞は、左歌については、御手洗川に関連させて「よにすまば」などと詠んだ点を「心ありてきこゆ」と評価している。また右歌については、「たつ事やすき（しめの内かは）」などと詠んだ姿を「をかくしきみゆ」と評価し、持としている。

二十一番 左持

公 時

二葉よりたのみぞわたる諸かつらつたはりきたる跡はたがはじ
右 定 家

ふかからぬ汀にあとをかきとめて御手洗河をたのむばかりぞ

左、もろかつら、二葉よりとおき、つたはりきたるなどいへる心姿、をかくしこそ待るめれ。

右、御手洗川をたのむゆゑにふかからぬことのはをかきとむらん、思ふ心なきにあらず。老の心なん乱れて勝負不分明。よりて猶持と申すべし。

【通釈】

二十一番 左持

公 時

幼い時から、賀茂の社の神をお頼りしています、——諸かずら（二

葉葵^{はあけい}をしるしに祭ってきた伝統を、信じております。

右 定家

182 至らぬ歌を書き留めて、奉納するにつけ、御手洗川の流れる社の神を、ひたすらお頼りしています。

左の「諸かづら」の歌は、「二葉より」と詠み、「つたはりきたる」などと詠んだ心や姿が、面白いように思います。

右の歌は、御手洗川の流れる社の神を頼る心から、至らぬ和歌を書き留めるといふ趣意のようで、思う心が認められない作ではない。(判定は)老生の心がまとまらず、勝負のほどが定かでない。そのため、やはり持と申しておこう。

【注】○二葉 幼少のころを意味するが、ここでは「諸かづら」が二葉葵であることから、その縁語として用いられている。○諸かづら 二葉葵の異名。二葉葵は山地の木陰などに生える多年草で、茎は地表をはい、葉は茎の先に二枚ずつ接近して互生し、ハート形。賀茂神社の葵祭に、髪や冠にさしたり、柱やすだれに掛けたりして、飾りに用いられた。○ふかからぬ みぎわの水が深くないことを通じて、和歌が至らぬものであることを示した。○御手洗河 二番の「注」参照。

【考察】左右の歌は、いずれも賀茂の社の神を頼りに思う心を詠むが、左の歌は、賀茂社の神を幼少のころから頼りにしていること、またその神を祭る伝統を確かなものと思うことを、「諸かづら」を第三句に据えて詠んでいる。「諸かづら」(二葉葵)は、賀茂社を象徴する植物であり、修辞の上では初句の「二葉」と縁語の関係を作り、四句の「つたはりきたる」も、二葉葵の茎が地表をはうように伸びる点で縁のある表現と思われる。

右の歌は、「御手洗河をたのむ」と言うことで、賀茂の社の神を頼る心を示しているが、その川の縁で「深からぬ汀」と言い、そこに「あとを書きとめ」と言うのは、未熟な歌を書き留めて奉納することを示したのであろう。

俊成の判詞は、左歌については「心姿をかしく」と批評し、右歌に

ついては「思ふ心なきにあらず」と批評する。その上で「老の心」が乱れて「勝負不三分明」として持とするが、ここには右歌の作者がわが子の定家であることにこだわる俊成の気持ちが出ているかと思う。

二十二番 左持 定宗

183 さりとともたのむ心になぐさむはかつがつ神のしるしなりけり

右 伊綱

184 さりとともかもの川波はやくよりのみをかくるしるしみせなん
左右ともに、さりとともといへる心すがたなど、をかしながら、^{をかく聞えながら}さ^{群書}せる詞のよせなくきこゆ。右は、賀茂の川浪によせたる心はをか^{類從}しきを、をはりの句のことば、いささかおとれるなるべし。なぞらふるに、又持とすべきにや。

【通釈】 二十二番 左持 定宗

183 それにしても、神の加護に頼る思いで、気が晴れるのは、さし当たって神の与えられる御利益というものです。

右 伊綱

184 それにしても、賀茂の社の神に、早くからお頼りしておりますので、どうか相応の御利益をお見せいただきたいものです。

左右の歌は、ともに「さりととも」と詠んだ心姿など、面白く思われるが、これという縁語などは見られないように思う。右の歌は、賀茂の川波に関係する言い様をした心は面白けれど、結句の「しるし見せなん」という言葉は、いささか劣ったものであろう。そういう長所短所を並べて見ると、これも持とすべきであらうかと思う。

【注】○さりととも それにしても(このままでは終わるまい)と思つて。「さりととも」は、現在の事態を承認しながら、その反対の事態を認めようとする心の表現。○かつがつ さし当たって。事態が十分でなくても当面成り立つことを示す用法。○かもの川波 賀茂の社の神

を示す一方、序詞として「はやく」を修飾する。○よせ 十八番の「注」参照。

【考察】左右の歌は、ともに初句を「さりとも」と置いて、神の加護を頼む身であることから、神の「しるし」についての思いを詠む。ただ左歌は神の「しるし」が一応実現されたとする着想に特色を見せるが、右歌はそうでない。また修辭の面では、左歌が目立った技巧を用いないのに対して、右歌は「かも川波」の語が賀茂の神を示す一方「はやく」の序詞になる程度の修辭は用いている。

俊成の判詞は、左右ともに「さりとも」と詠んだ心や姿を「をかし」と評しているが、とりたてた縁語などの修辭が見られない点に、やや不満を感じているようだ。なお右歌については、「賀茂の川波」に関連させて詠んだのを「をかし」とするが、末句の「しるしみせなん」は「いささか劣れる」ものとする。これは、上句の修辭上の工夫は認めるが、下句の神への願望の述べ様は露骨に過ぎると見たものかと思う。

二十三番 左持

165 山あるの袖ふる数はかさなりぬいつかうれしき事をつつまん

右 公衡 成家

166 行末はただすの神にまかせおきて昔の跡をふみもたがへし

左歌、山あるの袖にうれしきをつつむ事をかしとは思へる、さもある事にはみえ侍るなるべし。

右歌、ただすの神にまかせおきてといへる、かれ又しかるべし。ともに神慮を期せり。よりて持とすべし。

【通釈】

二十三番 左持

165 山藍摺りの袖を振って（神前で）舞うことが、もう度重なつた、
——いつ、うれしい事をこの袖に包む時が来るだろうか。

右 公衡

166 行く末のことは、糺の神に任せておいて、昔の人の残した足跡を、踏み外さずに歩もうと思う。

左の歌で、山藍摺りの袖に、うれしさを包みこむことに興味をもっているのは、もっともなことに思われるでしょう。

右の歌で、（行く末のことは）「ただすの神に任せおきて」と詠んでいるのも、しかるべきことであろう。左右ともに神のみに期待するところがある。そのため持としよう。

【注】○山あるの袖ふる 山藍摺りの衣の袖を振って神前で舞う姿を言ったのであろう。「山藍」は、トウダイグサ科の多年草で、その葉は衣服を青く摺り染めにするのに用いられた。賀茂社の臨時の祭を描いた屏風絵について俊成が詠んだ歌に、「月さゆるみたらし河にかけ見えてこほりにすれる山藍の袖」（『新古今集』一八八九）がある。○ただすの神 下鴨の糺の地に鎮座する神。賀茂御祖神社と撰社河合社の祭神。偽りをただす神とされた。

【考察】左の歌は、山藍摺りの袖を翻して神前で舞うことが重なつたので、神の御利益でうれしいことを袖に包む日が来るだろうと期待する心であろう。うれしいことを袖に包むと詠む先例には、次のような歌がある。

うれしさを何に包まむ唐衣たもとゆたかにたてと言はましを
（『古今集』八六五）

うれしさを昔は袖に包みけりこよひは身にもあまりぬるかな
（『和漢朗詠集』三七二）

右の歌は、行く末のことは、偽りをただすという糺の神にお任せして、今の自分としては昔の人の残した足跡を誤らずたどって行くとの意志を示したものであろう。

俊成の判詞は、左の歌については「さもある事」に見えると評し、右の歌についても「又しかるべし」と評し、「ともに神慮を期せり」と言って、持としている。

二十四番 左

季 広

167 さらりととも神のちかひをたのむこそしづむ歎のたえまなりけれ

右勝

備 前

168 千とせたつわかばの藤のさかへをも頼めば神にねぎぞかけつる

よせなく侍らん。

左、心は優なるべし。しづむ歎のなどいへるや、させることばの

はきこゆ。以、右為勝。

右、ちとせの松のわか葉の藤は、ねぎかくることばもことよりて

はきこゆ。以、右為勝。

【通釈】

二十四番 左

季 広

167 それにしてもと、衆生を救う神の誓いを頼りに思うのが、沈む身の嘆きの、途切れる時になるのだった。

右勝

備 前

168 千年の先までと望まれる、若葉の藤の栄えを、頼りに思いますので神にお祈りしたのです。

左の歌は、心は優美な作であろう。ただ、「沈む嘆きの」などと詠んでいるのが、これという縁のある言葉が見えない（ので物足りない）ように思うのです。

右の歌の、千年の栄えを保つ松に掛けて見る若葉の藤は、「ねぎかく」の言葉もふさわしいと思われる。右の歌を勝とする。

【注】○さりとともと 二十二番の「注」参照。○神のちかひ 衆生を救済しようとする、神の誓願。衆生救済の誓願は本来仏のものが、神仏習合の見方により、神のものとして言う。○しづむ歎 沈淪する身の嘆き。○千とせたつ 群書類従本は「千年まつ」とする。これによって解したい。○わかばの藤のさかへ 若葉の藤の栄えを通じて、藤原氏の若君といった人の繁栄を表したと思われる。ただし、だれのことか未詳。○頼めば ここでは、神を頼りに思うので、の意である。○ねぎぞかけつる 「ねぎかく」は、祈願する意。○よせ 十八番の「注」参照。○ことよりて 『平安朝歌合大成』に「言よりて」

と漢字をあてられるのに従って解し、言葉の上で縁をもつ意と見たい。

ここで俊成は、「ちとせの松のわか葉の藤」の本文によると、歌にない松を加えて記しているが、これは「藤波は君が千とせの松にこそかけて久しく見るべかりけれ」(『金葉集』三二六、大夫典侍)などのような歌が念頭にあって、藤を千年の松に掛けた姿としてとらえていたことが考えられ、すると「ねぎかく」の「かく」は藤と縁のある言葉になる。

【考察】左の歌は、それにしても現状のまま終わるまいと神の救いに頼みをつなぐのが、沈淪した身の嘆きの途切れる時になる、との心であらう。

右の歌は、藤原氏の若君といった人が、長く寿命を保ち繁栄することを、「千とせまつ若葉の藤」に例えて期待し、これを頼みに思う神に祈願したという心であろう。しかし、藤自体を千年の寿命を保つものと見るのは、いささか無理があるようだ。それで、次のような歌の伝統によって、千年の寿命をもつとされる松にかかる藤が意識されているのであらうと思う。

千とせへん君がかざせる藤の花松にかかれる心地こそすれ(『後拾遺集』四五七、良暹)

千とせふる二葉の松にかけてこそ藤の若枝は春日さかえめ(『後拾遺集』四四〇、源頭房)

藤波は君が千とせの松にこそかけて久しく見るべかりけれ(『金葉集』三二六、大夫典侍)

判詞の本文に「千とせの松の若葉の藤」と、歌の言葉にない松を加えた形が見えるのも、そういう意識によるものと思われる。

俊成の判詞は、左歌については、「心は優」と評する一方、「しづむ歎の」という言い様に「させる言葉のよせ」のないことを不満としている。「しづむ」に関して縁語を用いるような表現上の工夫を求めたものであらう。

そういう観点に立てば、右歌が前述のように千年の松にかけて藤を

とらえたとする、「ねぎかくる」の言葉がそれと縁のある表現と見られるので、その点を「言よりて」と評価して、勝としたものと思われる。

二十五番 左

兼綱

179 おもふ事かなはでやまばうき身ゆゑ又雲わけん事ぞかなしき

右勝

智将

170 わがたのむ心の程をみたらしの水のみなかみくみてしらなん

左の歌は、姿は優に侍り。但、雲の詞、さてもやあるべからむ。

かやうのことは、かつは作者により、をりに随ふべきなり。

右歌、心のそこを御手洗のおけるは、をかしくみゆ。末にくみてしるかな（群書類従）といへるや、事かさなるやうならむ。但、猶右勝つべし。

【通釈】

二十五番 左

兼綱

179 私の願いがかなわずに終われば、この憂き身のために、賀茂の神が（神詠どおり）また雲を分けて去られると思うと、悲しい。

右勝

智将

170 私がどれほど深く神を頼る心で見えて、御手洗川の流れの源にある神には、察していただきたいと思います。

左の歌は、姿は優美です。ただ、雲を分けて昇天するといった

（神詠の）言葉は、そのまま用いてよいのだろうか。このようなことは、（基本的には）作者にもより、また場合にもよるべきことであると思う。

右の歌で、「心の底をみたらしの」と詠んだのは、面白いと思われる。ただ末句に「くみて知らなむ」と詠んでいるのは、これと内容が重複しているであろう。ただし、やはり右の歌が勝ると思う。

【注】○又雲分けん『袋草紙』に「賀茂御歌」として挙げる「我たの

む人いたづらになしはてば又雲分けてのぼるばかりぞ」（一九六、『新古今集』一八六一）の一首により、賀茂の神が、天下った時と同様に天雲を分けて天に昇ることを言う。○心の程をみたらしの「心の程を見」に「みたらし」川をかける。○くみてしらなん 察知してほしい意。「くみて」は「みたらしの水」「みなかみ」の縁語。

【考察】左の歌は、「注」で触れたように、賀茂の神の詠とされる次の一首によっている。

我たのむ人いたづらになしはてば又雲分けてのぼるばかりぞ
（『袋草紙』一九六、『新古今集』一八六一）

この一首は、自分を頼る人の願いを空しいものにしたら、自分は再び雲を分けて天に昇るばかりだと、賀茂の神が信仰する者の願いを成就させる誓願を詠んだ歌と見られる。左歌はこれによって、私の願いがかなわなかったら、この憂き身のために賀茂の神が神詠どおり昇天されると思うと悲しい、と詠んだものであろう。

右の歌は、御手洗川の「みなかみ」の言葉で賀茂の神を示し、自分の信仰心の深さを、その神は察知していただきたくと詠んだものであろう。「心の程を見」に「みたらし川」を掛け、また「みたらし川の水のみなかみ」と言った縁で「くみて知らなん」と詠んでいる。

俊成の判詞は、左の歌については、「姿は優」とする。ただ、雲を分けて昇天するといった、特殊な神詠の言葉を用いることを問題として挙げ、作者や場合によることとしている。

右の歌については、「心の程をみたらしの」という、掛詞による続け様を「をかしく見ゆ」と評価する。しかし末句の「くみてしらなむ」という表現は、「事かさなる」と批判している。前の「心の程を見」とあるのと、「くみて知」るのが、内容として重複するという指摘であろう。ただその上で、左右を比べると右が勝ると判定している。

二十六番 左持

左持

敦仲

171 たのみこし其神山のしるしありてさかゆく道の程をしらばや

右

勝命

172今はとていそぐ心をほにあげてかの岸ちかく行く舟もがな

左、その神やまは、いかがはさかゆくことなからんときこゆ。

右、かの岸をねがへる心、あはれにみゆ。心詞とりどりなり。持とすべし。

【通釈】

二十六番 左持

敦仲

173頼りにしてきた賀茂の神の御利益があつて、どのように榮えてゆくことになるのか、知りたいものです。

右

勝命

174今は世に別れる時として、西方へ急ぐ心に導かれ、あなたの岸（悟りの世界）に近づく船があればと思う。

左の、「その神山」を頼る歌は、必ず（御利益で）榮えてゆくこととなるであろうと思われる。

右の歌の、あなたの岸に至ることを願った心は、あわれに思われる。左右の歌は、心、言葉にそれぞれの特徴が見られる。持とすべし。

【注】

○其神山 十四番の「注」参照。○さかゆく 榮えてゆく。同音の「坂行く」の関係で「神山」の縁語。○いそぐ心 西方浄土へ急ぐ心。○かの岸 「彼岸」を訓読した語。「彼岸」は仏教の言葉として、悟りの境地のこと。○ほにあげて 「帆に上げて」は、導くものとしての意を、「岸」「舟」の縁でこう言った。

【考察】左の歌は、信仰してきた賀茂の神の御利益で、今後どのように榮えてゆくことができるのか、知りたいと詠む。「その神山」の語で賀茂の神を示し、「榮ゆく」に「坂行く」を掛けて「神山」の縁語としている。

右の歌は、今は俗世に別れるべき時と、西方浄土へ急ぐ心に導かれて、彼岸に向かう船がほしいと詠む。「帆に上げ」「岸」「船」と縁語を用いている。

俊成の判詞は「心詞とりどりなり」と評し、持とする。

二十七番 左持

広言

175世にすみて御手洗川を頼む身はうれしき瀬にもあはざらめやは

右

祐盛

176やはらぐる月のかつらの光にはこむよのやみもなにかまよはむ

左の歌、世に住みてとおき、せにもなどたのもしくきこゆ。

右歌、姿よろしきやうにはみえ侍り。但、やはらぐる光、こんよのやみなどいへる事、すみよしの社の歌合にや見侍りし心ちぞする。ひがおぼえにや侍るらん。仍勝劣申しがたし。

【通釈】

二十七番 左持

広言

177世に住んで、清らかに御手洗川の流れる社の神を頼る私は、うれしく思う折に遭えるに違いない。

右

祐盛

178仏が神となりこの世を照らす光、月光のお陰で、次の世の無明の闇も、迷うことはないはずです。

左の歌は、「世にすみて」と言い、「（うれしき）瀬にも」などと詠んでいるのが、たのもしく思われる。

右の歌は、姿が結構なようには見えます。ただし、「やはらぐる光」とか「こむ世のやみ」とか言っているのは、『別雷社歌合』の歌で見掛けたような気がするのは、これは私の記憶の誤りなのでしょうか。そのため、勝負を決めかねます。

【注】○世にすみて 「すみて」は「住みて」の意だが、同音の「澄みて」の関係で「御手洗川」の縁語になる。○御手洗川 二番の「注」参照。ここではその川の流れる上賀茂神社の神を示す。○やはらぐる

月のかつらの光 「やはらぐる…光」は、「和光」の訓読で、仏・菩薩が威徳の光を和らげて衆生の間に現れることを意味し、特に日本では本地垂迹説によって神として現れることを言う。「月のかつらの光」

は、月の中に桂の大木があるとする古代中国の俗信による語で、月光を言う。そして月光は、仏教では無明の闇を照らす仏性の象徴ともされる。そのような月光を、ここでは、仏・菩薩の化現である神が世を照らすものものとして言っているであろう。○こむよのやみ 来む世の闇。来世における無明の闇。「やみ」は、真理に暗い無知な心、すなわち仏教で言う無明の心の状態を例えて言う。なお「よ」は「夜」を掛け、「やみ」とともに「月」「光」に対する縁語となる。○すみよしの社の歌合 住吉社歌合。嘉応二年（一一七〇）、藤原敦頼（のち出家し、法名道因）が勧進して、摂津の住吉神社に奉納した歌合。俊成が判者を務めている。

【考察】左の歌は、賀茂の社の神を頼る自分は、うれしく思う折に遭えるに違いない旨を詠む。「御手洗川」の語は、賀茂の社の神を示し、修辞上「すみて」「瀬」と縁語関係を作る。

右の歌の、「やはらぐる月の桂の光」は、「注」で触れたが、仏・菩薩の化現である神が世を照らす光を、月光として言ったと見られる。そして、その光のお陰で、「来む世のやみ」すなわち来世における無明の心の闇にも、迷うことはあるまいと詠んだのであろう。僧としての作者らしい詠み様の作と思う。

ただ、この右歌は、俊成が判詞に指摘するとおり、作者の祐盛が『住吉社歌合』に出詠した次の歌と、主な語句や発想などの面で似たところがある。

やはらぐる光をたのむしるしにはこむよのやみをてらさざらめや
(述懐十九番)

これは『住吉社歌合』で俊成が、

心の思ふところこそあはれに侍れ。

と評し勝とした歌である。作者の祐盛としては、これに「月のかつらの光」を加えるなど、さらに工夫を加えて当面の右歌のように仕立てたものと思われる。

しかし俊成は、右歌を「姿よろしきやう」には見えると評しながら

も、すでに『住吉社歌合』に出した歌と主なところが似ている以上、ここに出すのは不適當と見たようである。

【備考】二十七番右歌は、『新統古今集』（二一一二）に収められている。

二十八番

左持

師さりとともよをまつ程に身につもる年ばかりこそ人におとらね

右

安性

我が為は後のうきせをわたさなん又雲わけん神の名もをし

左、よを待つほどになどいへるや、かの在明の月の光を待つほどにといへるにはにすぎこゆらん。おとらねといひはてたるも、散散なる心地やすらん。

右の、後のうきせをといへる、いうなるべし。かはなどやあらまほしからん。のちの句はさてもありぬべきよし、さきに申しをはりぬ。歌さまおなじ程なるべし。

【通釈】

二十八番 左持

親盛

師それにしてもと、時節を待つうちに、我が身に加わる年、この年の数だけは人に劣らぬことになった。

右

安性

私にとつては、後のつらい折を乗り切つて（彼岸に）行けるよう、

神の助けがほしいのです、——（願いがかなわず）賀茂の神が天に帰られては、神の名も惜しまれます。

左の歌で、「よを待つ程に」などと詠んでいるのは、あの「有明の月の光を待つほどに（わが世のいたくふげにけるかな）」と詠んだのに比べると、及びがたいと見えるかと思う。最後に「おとらね」と言い切つて終わっているのも、取り柄のない感じがするであろうか。

右の歌で、「後のうきせを」と詠んだのは、優しい表現であろう。

(ただ「うきせ」と言えば、縁のある語として) 川などを詠み入
りたいように思う。下の句の「又雲わけん神の名もをし」(とい
う神詠の言葉を用いた表現) については、そう詠む場合もあり得
る旨を、先に(二十五番判詞に) 申しておいた。歌の様子は左右
同じ程度であろう。

【注】○さりとともと 二十二番の「注」参照。○よをまつ 世を待つ。
(不遇から脱する) 時節を待つ。○うきせ 憂き瀬。つらい折。「浮き」
や水の浅い「瀬」を掛けて「わたす」と縁語関係にしたものであろう。
○わたさなん 渡してほしい。ここでは、彼岸(悟りの浄土)へ行か
せてほしいと神に願う心であろう。○又雲わけん 賀茂の神の詠とさ
れる一首による言葉。後の「考察」で触れる。○神の名もをし 神の
御名にも傷がつくかと惜しまれる。○在明の月の光を待つほどに 藤
原仲文の歌「ありあけの月の光を待つほどにわがよのいたくふけにけ
るかな(『仲文集』四三、『拾遺集』四三六) による。『拾遺集』の詞
書に、「冷泉院の東宮におはしましける時、月を待つ心の歌、をのこ
どもの詠み待ちけるに」とある。月を待つ心に、不遇から脱すること
を期待して過ごすうちに年老いた嘆きを重ねて訴えた作。

【考察】左の歌は、不遇の状態から脱する時節が来ることを期待して
過ごすうちに年をとり、年だけは人に劣らぬ身になったと嘆いている。
右の歌は、どうか自分を悟りの浄土へ行かせてほしいと神に願う心
を、上の句に詠み、下の句にそれを受けて「又雲わけん神の名もをし」
と言い添えている。この下の句は、二十五番左歌の場合と同様、賀茂
の神詠とされる次の歌によったと思われる。

我たのむ人いたづらになしはては又雲分けてのぼるばかりぞ
〔袋草紙〕一九六、〔新古今集〕一八六一

自分を頼る人の願いをかなえられなかったら、また雲を分けて昇天
するばかりだという賀茂の神の誓願を詠んだ歌である。右の歌は、も
しそうなれば、神の御名にもかわると言ったのである。

俊成の判詞は、左歌については、「よを待つほどに」などと詠んだ

のが、「注」で触れたように、やはり不遇から脱する折を期待して待
つ心の藤原仲文の歌の、「在明の月の光を待つほどに」〔拾遺集〕四
三六)と比べると、及ばないと言う。また結句に「人におとらね」と
言い切った詠み様も、「散散なる心地」がするという本文によれば、
かなり手きびしく批判している。

右の歌については、「後のうき瀬を」という表現を「優」とするが、
それに関連して川などを詠み入れるのが望ましいことを言っている。
ただその上で左右の歌を全体的に見て、「歌さま」は同様であろうと
記す。

二十九番 左勝

17 むかしより御手洗川にすましつる心の月をうかべつるかな 寂念

右 行念

18 いはずとも神はしるらんみてぐらにしてもたのみをかくる心を

左右歌、いづれも心は優には侍るを、右みてぐらににしてもなどい
へるすがた、俗に近くやあらむ。

左の心の月をなどいへるすがた、よろしきにや侍らん。勝と申す
べきにや。

【通釈】

二十九番 左勝 寂念

17 昔から見(て心を澄まし) た御手洗川に、曇りなく澄ました心その
ままの月が浮かぶのを、眺めたことだ。

右 行念

18 言わなくても、神は御存じであろう、——幣帛に四手も掛けて、神
をお頼りする私の心を。

左右の歌は、いづれも心は優美ではありますが、右の歌で「みて
ぐらににしても」などと言っている詠み様は、俗に近いところがあ
ろうか。
左の歌で「心の月を」などと詠んでいる姿は、結構であろうかと

思います。左の勝と申すべきかと思う。

【注】○御手洗川 二番の「注」参照。ここでは前の「むかしより」に続けて「見たる」を掛けて言ったと見たい。○心の月をうかべつるかな 「心の月」は、「心月」の訓読みで、心が清く澄む様子を明月に例えて言われる。ここでは清く澄んだ心を水面にうつる月に見いだしたことを言ったのである。○みてぐら 神に奉納する物、幣帛などを言う。○しで 玉串やしめ縄に掛けて垂らす木綿（後に紙）。「四手」の字をあてることもあるが、動詞「垂ぶ」の連用形の名詞化した語と思われる。後の「たのみをかくる」の「かくる」は、これと縁語になるように仕立てたものか。

【考察】左の歌は、神域の御手洗川に、曇りなく澄ました心そのままに映る月を眺めたとの心であろう。仏教では清く澄んだ心を明月に通じるとする見方の伝統があり、この歌はそういう見方によるところがあるかと思う。

右の歌は、「みてぐらにしもたのみをかくる心」という言い様が分かりにくい、幣帛に四手も掛け、神に頼みを掛けて祈る心と解してみた。そのようにして祈る自分の心を、言葉に出さなくても神は御承知くださっているであろうという歌意かと思う。

俊成の判詞は、左右の歌はいずれも心は「優」とするが、右歌については、「みてぐらにしも」掛けて神を頼むといった詠み様を、姿が「俗に近く」見えると批判している。そして左歌については、澄んだ「心の月を」御手洗川に眺めたなどと詠んだのを、姿が「よろしきにや」と評価し、勝とする。右歌に比べて脱俗の姿を認めて評価したのであろう。

三十番 左

179 千はやぶる御手洗川にあふせには波立ちまさるうたかたもがな
右勝 重保

180 すべらぎのねがひを空にみてたまへわけいかづちの神ならば神

左歌、みたらし川に思ひをのぶるに、波立ちまさるうたかたもがなといへる、しきしまの道を波波おもへる、心ざしふかからんと、優にはきこゆ。

右の歌、祈精するには聖主万年之榮、かけたてまつるとては下社上社之恵、このころことばかたがたかけまくもかしこし。ねがひをそらになどいへる心、尤是祝言。是叶神慮歟。仍為勝。

【通釈】

三十番 左

179 御手洗川の流れる、賀茂のみ社の会の折には、どうか優れた歌を詠みたいものと思います。

右勝

重保

180 みかどの千代の榮えを祈る願いを、空でかなえてください、(天下られた)別雷の神ならば、神よ。

左の歌は、御手洗川に託して思いを述べるのに、「波立ちまさるうたかたもがな」と詠んでおり、これは和歌の道を心が進まぬながら思っているようで、心ざしが深いとは言えないが、優しいものとは感じられる。

右の歌は、祈願する事柄としては、聖天子の万年の榮えであり、お願いする先に関しては、下賀茂・上賀茂の社の神の恵みを望んでいて、その心といい言葉といい、口にするのも恐れ多いことに属する。「願ひを空に(みてたまへ)」などと詠んだ心も、まことに祝詞としてふさわしい。これは神のみ心になうものかと思う。そのため右の歌を勝とする。

【注】○千はやぶる 神または神に類する語にかかる枕詞。○御手洗川にあふせ 「御手洗川」は、二番の「注」参照。「あふせ」は、会う時の意であるが、「瀬」として「川」の縁語となる。○波立ちまさるうたかた 前の「川」や「瀬」との縁で「波立ち」「うたかた」と言うが、「立ちまさる歌」すなわち優れた歌の意を表わす。○すべらぎのねがひ 『千載集』には「君をいのるねがひ」の形で収められるの

を参照すると、みかどの千代の栄えを祈る願いの意と思われる。○みてたまへ「みて」は、みたす意の古い動詞と考えられる「みてる」(下一段活用の他動詞)の連用形。ここでは「ねがひを」に続けて、願いを満たす、願いをかなえる意。○わけいかづちの神 別雷の神。賀茂別雷命。上賀茂神社の祭神で、本来雷神であったかと考えられる。○神ならば神 神であるならば靈験を現わしてください、と神に呼びかける言葉。能因の歌に「天の川なはしる水にせきくだせ天下ります神ならば神」(『金葉集』六二五)と詠まれている。○しきしまの道 しきしまの大和歌の道の意で、和歌の道と言う。○心ざしふかからんと 群書類従本に「ころざしふかからねど」とあり、「通釈」はこれによって記した。○祈精「祈請」のことか。○下社上社 ここでは下賀茂神社(賀茂御祖神社)、上賀茂神社(賀茂別雷神社)。

○かけまくもかしこし 口に出して言うのも恐れ多い。「まく」は、推量の助動詞「む」のク語法。
【考察】左の歌は、賀茂の社を「ちはやぶる御手洗川」の語で示したことから、川に縁のある「瀬」「波立ちまさる」「うたかた」などの語をちりばめて詠んでいるが、主旨は、賀茂の社の会の折には「たちまさる歌」を詠みたいと願うというのであろう。川に寄せた修辭は巧みとも言えるが、賀茂社に奉納する歌合の歌としては、歌を示すのに「うたかた」、泡というはかないイメージを伴うものを用いた点に、問題があるかもしれない。

右の歌は、冒頭の「すべらぎのねがひ」が何を言ったものか、分かりにくい。一首は『千載集』には次の形で見える。

君をいのねがひを空にみてたまへわけいかづちの神ならば神
(一一七三)

これは俊成が手を加えた形かと思う。ともかく、これによって、みかどの千代の栄えを祈る願いを言ったものと見たい。すると一首は、そういう願いを、「空に」満たしてください、「別雷の神」であるならば神よと呼びかけた心と見られる。「空に」と天空を挙げたのは、別

雷の神が本来雷神で空に関係があり、神詠として

我たのむ人いたづらになしはてば又雲分けてのぼるばかりぞ
『袋草紙』一九六、『新古今集』一八六一

の歌が伝えられるように、空から天降られた神として敬う心に基づくのである。右歌の末尾の「神ならば神」という別雷の神に呼びかけて靈験を願う言葉も、「注」で触れたように、能因の歌の「天下ります神ならば神」(『金葉集』六二五)によったもので、天下られた神への特別な意識を反映していると思われる。

俊成の判詞は、左歌については、「しきしまの道を洪洪おもへる」という本文によれば、和歌に向ける心が不十分な点を指摘したと見られるが、これは前述のように「うたかた」の語で和歌を示したことにかわるかと思う。ただ一首は「優にはきこゆ」と評している。

右歌については、天皇の末長い栄えを賀茂の社の神に祈った心言葉を優れたものと認め、神慮にかなう歌であろうと言ひ、勝としている。賀茂別雷社に奉納する歌合を結ぶ一首として、歌合を催した神主賀茂重保の歌を重く見たと思われる。なお、この歌は『千載集』には一・二句が異なる形で収められているが、俊成が後に手を加えたものかと思う。

【備考】三十番右歌は、『千載集』(一一七三)に、一・二句が「君をいのねがひを」の形で収められている。

○作者一覧。歌の作者について概要を記す。

。作者名の上のアラビア数字は、作者の歌の見える部分の
番数を示す。

1 隆季 たかすえ 藤原隆季。中納言家成の子で、顕季の曾孫。正二位権大納言に至る。一一二七—一一八五。

1 観連 かんれん 俗名藤原教長。大納言忠教の子。参議正三位左京大夫に至るが、保元の乱で敗走、出家。配流後召還。家集『貧道集』。一一〇九—一一八〇ころ没か。

- 2 実房 さねふさ 藤原実房 内大臣公教の子。正二位左大臣に至る。
一一四七—一二二五。
- 2 讚岐 さぬき 二条院讚岐。従三位源頼政の女。二条院に出仕し、
院没後は藤原重頼の妻になったが、のち後鳥羽院中宮任子に出仕。
家集『二条院讚岐集』。一一四二—一二二七ころ没か。
- 3 実国 さねくに 藤原実国。内大臣公教の子。(前出の実房の兄。)
正二位権大納言に至る。家集『実国集』。一一四〇—一一八三。
- 3 登蓮 とうれん 系譜未詳。僧で、歌林苑の会衆。数寄者として
『無名抄』に逸話が見える。家集『登蓮法師集』。生没年未詳。
- 4 時忠 ときただ 平時忠。贈左大臣時信の子。正二位大納言に至る。
平家滅亡後、能登に配流。一一三〇—一一八九。
- 4 俊恵 しゅんえ 俗姓は源。木工頭俊頼の子。東大寺の僧となる。
白川の自坊歌林苑に広く歌人たちを集めて交流の場とし、歌合や
歌会を催した。家集『林葉集』。一一一三—没年未詳。
- 5 成範 しげのり 藤原成範。もと成憲(信西)の子。
平治の乱で下野に配流されたが、のち正二位中納言民部卿に至る。
一一三五—一一八七。
- 5 通親 みちちか 源通親。内大臣雅通の子。正二位内大臣に至る。
『高倉院嚴島御幸記』等の作者。一一四九—一二〇二。
- 6 雅頼 まさより 源雅頼。中納言雅兼の子。正二位中納言に至る。
一一二七—一一九〇。
- 6 公重 きんしげ 藤原公重。中納言通季の子。閑院流の名門の出身
だが官位は正四位下右近少将にとどまる。家集『風情集』。一一
一八か—一一七八。
- 7 実綱 さねつな 藤原実綱。内大臣公教の子。(前出の実国、実房
の兄。)正三位権中納言に至る。一一二六—一一八〇。
- 7 師光 もろみつ 源師光。大納言師頼の子。左大臣藤原頼長の猶子。
そのためか官位は正五位下右京権大夫にとどまる。法名生蓮。
家集『師光集』。生没年未詳。
- 8 実守 さねもり 藤原実守。右大臣公能の子。従二位権中納言に至
る。一一四七—一一八五。
- 8 大輔 たいふ 殷富門院大輔。藤原信成の女。後白河院皇女亮子
内親王(殷富門院)に出仕。歌林苑の会衆。家集『殷富門院大輔
集』。一一三二—一二〇〇ころ。
- 9 永範 ながのり 藤原永範。文章博士永実の子。正三位宮内卿式部
大輔に至る。一一〇〇—一一八〇。
- 9 成仲 なりなか 祝部成仲。日吉社禰宜成実の子。日吉社禰宜にな
る。家集『成仲集』。一〇九九—一一九一。
- 10 経盛 つねもり 平経盛。刑部卿忠盛の子。清盛の弟。正三位参議
に至る。壇の浦の合戦に敗れて入水。家集『経盛集』。一一二四—
一一八五。
- 10 資隆 すけたか 藤原資隆。もと秀隆。豊前守重兼の子。少納言に
なる。歌林苑会衆。家集『禅林療葉集』。生没年未詳。
- 11 修範 ながのり 藤原修範。少納言通憲(信西)の子。(前出の成
範の弟。)平治の乱で隠岐に配流されたが、のち正三位左京大夫
に至る。一一四三—一一八三か。
- 11 顕家 あきいえ 藤原顕家。大宰大式重家の子。非参議正三位に至
る。一一五三—一二二三。
- 12 釈阿 しゃくあ 俗名藤原俊成。権中納言俊忠の子。早く葉室顕頼
の養子となり、名を顕広と言ったが、のち本流に復して俊成と改
名。正三位皇太后宮大夫に至る。一一七六年出家、法名釈阿。多
数の歌合の判者を務め、歌壇の指導者として認められた。『千載
集』を撰進。家集『長秋詠藻』、『古来風体抄』等の歌学書も残す。
一一一四—一二〇四。
- 12 頼政 よりまさ 源頼政。兵庫頭仲正の子。従三位に至る。武将と
して以仁王を奉じ平家と戦い、敗れて宇治で自害。歌林苑の会衆。
家集『源三位頼政集』。一一〇四—一一八〇。
- 13 静賢 じょうけん 俗姓は藤原。少納言通憲(信西)の子。平治の

乱では安房に配流された。法勝寺等の執行、法印。一一二四—没年未詳。

13 季経 すえつね 藤原季経。左京大夫顕輔の子。非参議正三位に至る。清輔没後は六条藤家の代表歌人と目された。家集『季経入道集』。一一三二—一二三二。

14 範玄 はんげん 俗姓は藤原。伊賀守為業(寂念)の子。興福寺別当、権僧正。一一三七—一九九。

14 経家 つねいえ 藤原経家。太宰大式重家の子。(前出の顕家の兄。)非参議正三位に至る。家集『経家卿集』。一一四九—一二〇九。

15 頼輔 よりすけ 藤原頼輔。もと親忠。大納言忠教の子。刑部卿従三位に至る。歌林苑会衆。家集『頼輔集』。一一二二—一一八六。

15 道因 どういん 俗名藤原敦頼。治部丞清孝の子。従五位上左馬助になる。一一七二年出家、法名道因。歌林苑会衆。『住吉社歌合』。

『広田社歌合』等を勸進。一〇九〇—没年未詳。

16 隆房 たかふさ 藤原隆房。権大納言隆季の子。権大納言正二位に至る。家集『隆房集』。一一四八—一二〇九。

16 親宗 ちかむね 平親宗。贈左大臣時信の子。正二位中納言に至る。家集『親宗集』。一一四四—一九九。

17 有房 ありふさ 源有房。大藏卿師行の子。左大臣有仁の養子。正四位下左中将になる。家集『有房集』。生没年未詳。

17 経正 つねまさ 平経正。参議経盛の子。正四位下皇太后宮亮になるが、一ノ谷の合戦で戦死。歌林苑会衆。琵琶の名手でもあった。家集『経正集』。生年未詳—一一八四。

18 忠度 ただのり 平忠度。刑部卿忠盛の子。(前出の経盛の弟。)右衛門佐、薩摩守などになるが、一ノ谷の合戦で戦死。一一四四—一一八四。

18 寂蓮 じゃくれん 俗名藤原定長。阿闍梨俊海の子。伯父俊成の猶子。従五位上中務少輔になるが、一一七二ごろ出家、法名寂蓮。

『六百番歌合』で顕昭と論争した。『新古今集』の撰者の一人になるが、撰進前に没した。家集『寂蓮法師集』。一一三九ごろ—一二〇二。

19 盛方 もりかた 藤原盛方。中納言顕時の子。中宮大進、出羽守になる。歌林苑の会衆。一一三七—一一七八。

19 顕昭 けんしょう 俗姓は藤原。藤原顕輔の猶子。法橋の僧位を受ける。歌人として六条藤家の人々とともに活躍。『袖中抄』等の歌学書を残す。一一三〇ごろ—一二〇九以後没か。

20 隆信 たかのぶ 藤原隆信。皇后宮少進為経(寂超)の子。母の美福門院加賀は、のち俊成と再婚。右京権大夫になる。家集『隆信集』。一一四二—一二〇五。

20 仲綱 なかつな 源仲綱。従三位頼政の子。伊豆守などになったが、宇治川の合戦に破れて自害。歌林苑の会衆。一二二六—一一八〇。

21 公時 きんとき 藤原公時。権大納言実国の子。従二位中納言になる。一一五七—一二二〇。

21 定家 さだいえ 藤原定家。皇太后宮大夫俊成の子。正二位権中納言に至る。『新古今集』『新勅撰集』の撰者となる。家集『拾遺愚草』。歌学書に『近代秀歌』『詠歌大概』などがある。一一六二—一二四一。

22 定宗 さだむね 源定宗。左馬頭顕定の子。少納言になる。生没年未詳。

22 伊綱 これつな 藤原伊綱。刑部大輔家基の子。中務大輔になる。歌林苑の会衆。生没年未詳。

23 成家 なりいえ 藤原成家。皇太后宮大夫俊成の子。(前出の定家の同母兄。)正三位兵部卿に至る。一一五五—一二二〇。

23 公衡 きんひら 藤原公衡。右大臣公能の子。同母兄実守の養子になる。従三位左近中将に至る。家集『三位中将公衡集』。一一五八生か—一一九三。

24 季広 すえひろ 源季広。木工権守季兼の子。下野守になる。歌林苑の会衆。生没年未詳。

24 備前 びぜん 系譜等未詳。諸本の作者名に「前斎院備前」とあるのによれば、殷富門院に出仕した女房かと思われる。

25 兼綱 かねつな 未詳。あるいは丹後守藤原為忠の子（後出の寂念の兄）で、為盛から兼綱に改名した人か。『為忠家初度百首』に「散位藤原為盛左近大夫改名兼綱」とある。一一二二ころ生か—没年未詳。

25 智将 未詳。

26 敦仲 あつなか 藤原敦仲。もと憲成。右馬助敦頼（道因）の子。式部大輔になる。歌林苑会衆。生没年未詳。

26 勝命 しょうみょう 俗名藤原親重。もと憲親。佐渡守親賢の子。美濃権守になる。のち出家、法名勝命。歌林苑会衆。一一二二—没年未詳。

27 広言 ひろこと 惟宗こねむね広言。日向守基言の子。筑後守になる。歌林苑会衆。『広言集』。生没年未詳。

27 祐盛 ゆうじょう 俗姓は源。木工頭俊頼の子。（前出の俊恵の弟。）叡山阿闍梨。歌林苑会衆。一一一八—没年未詳。

28 親盛 ちかもり 藤原親盛。大和守親康の子か。左衛門尉になる。家集『親盛集』。生没年未詳。

28 安性 あんしょう 俗名中原時元。『拾遺歌苑抄』（散佚私撰集）の撰者。生没年未詳。

29 寂念 じゃくねん 俗名藤原たのまら為業。丹後守為忠の子。皇后宮権大進に至るが、出家し、法名寂念。弟の寂超、寂然とともに大原おほはら三寂と言われた。生没年未詳。

29 行念 ぎょうねん 系譜等未詳。伝寂蓮筆本には「僧行念大進入道」とある。

30 佐 すけ 伝寂蓮筆本に「八条院佐」とあるのによれば、八条院（鳥羽院皇女障子）に出仕した女房。『平安朝歌合大成』では、八条院女房「右衛門佐」が藤原資隆（十番作者）の女であることが『玉葉』に見える点を指摘した上で、なお疑問が残る旨を記され

る。

30 重保 しげやす 賀茂重保。賀茂神主重継の子。別雷社神主になる。歌林苑会衆。私撰集『月詔和歌集』を撰んだ。一一一九—一一九一。

○付記

『別雷社歌合』は、よい本文が現在部分的にしか見られず、その方面での発見が待たれる。けれども藤原俊成の判詞をもつ、当時の代表的な大歌合の一つとして注目されるところから、解釈を試みた。

解釈に難渋することも少なかつたが、特に述懐六番、九番、十五番で、判詞に引用された文章の出典が確認しきれぬままになったのは、心残りである。また、私の気付かない誤解もあろうかと思う。御覧いただける方には、お気付きの点を御教示たまわれれば幸いである。